

# 追三代於鼎彝之間

——宋代の「考古」から「玩古」への展開について——

陳芳妹  
金立言 記

## 序

- 一、士大夫の新価値観と「三代銅器」への「考古」
- 二、皇室の新たな価値観と倣古
- 三、三代の銅器の意象の展開——スポンサー層の変化と使用層の拡大
  - (一) 儒家から仏教、さらに民間信仰へ
  - (二) 「窖藏」に見る三代の銅器の意象
  - (三) 三代の銅器の意象を「殉埋」する
- 四、考古から玩古へ
  - (一) 古物市場の隆盛
  - (二) 廟堂から「明窓浄几」——「塵外之客」への新たな価値観

## 余論

## 序

古代銅器の研究に比べ、宋代のそれはやや落ちついた状況にある。宋代にあっては、銅はすでに工芸品の主要な材質ではなく、基準資料も少ないことから、研究の方はやや貧弱な状況となっている。しかし、近年では考古資料の新たな出現により研究の土台が次第に整えられ、成果も増えたことから、

この分野をさらに掘り下げて論及することが可能になりつつある。

実際、宋代の文献には金文に関する記録が多いことから、清末から中華民国の時期にはすでに学界の注目するところになっていた<sup>(1)</sup>。さらに銅器に関連する「古物研究者」「古物收藏家」「古物倣造」「偽造」「古物市場」などが論じられ、「著録」「収蔵」「倣造」「真贋」「価値」などの問題も議論の対象となった<sup>(2)</sup>。しかし、ここ約七〇年来の古代銅器への活発な研究状況に比べ、宋代の銅器研究は「骨董的」な性格を持つものとして、おろそかにされてきたといっても過言ではない。一九八二年、台湾の研究者は宋代の文献に見える古代銅器と石刻に関する記載を基に、宋代の金石学についての包括的な研究を発表したが<sup>(3)</sup>、宋代銅器の造形的な問題にはあまり触れなかった。

それに比べ欧米の美術館は、宋代以後の銅器を多く所蔵している関係から、これらに関する研究も早くから行われてきた<sup>(4)</sup>。とくに、「倣古」の視点からの議論は有益なもので、古代銅器との比較が行われた上で、『考古図』と『宣和博古図』が以後の倣古のテキストになったことが確認された<sup>(5)</sup>。また宋代以後の銅器は、文人趣味との関わりの上でも看過できない課題であるとも

位置づけられている。<sup>(6)</sup>

例えばイギリスのロンドンにあるビクトリア・アルバート美術館の銅器コレクションには、中国古代の作品よりも宋代以後のものが圧倒的に多いことから、同館ではまとまった研究が行われてきた。各時代の基準作品が洗い出され、その器形や文様、技法などを詳細に報告した図録が出版されているが、これは一館の資料のみから得た知見であった。九〇年代に入ると、宋代の青銅器制作をヨーロッパのルネサンスに例えて論じる研究者が現れ、研究の地平を広げている。<sup>(7)</sup>

二〇世紀以降、宋代以後の銅器研究について、中国人研究者の成果はまれであった。<sup>(9)</sup>二〇〇〇年、台湾の国立故宮博物院では宋代文物の大きな展覧会が行われた。<sup>(10)</sup>それに合わせ、李公麟 Li Gonglin の『考古図』がさらに検討され、宋代銅器の研究に大きな進展が見られた。すなわち、『考古図』の役割は当時の「再現三代」の復古運動に深く関わり、裏には士大夫階級と宮廷が関与していたことが浮き彫りとなった。儒学は宋代で重んじられ、徽宗皇帝やその周辺にいた官僚が、この復古運動に政治的な意味合いを持たせた。<sup>(11)</sup>なお、宋代の瓷器に見る一群の「官様」の作品も、銅器の器形を写すところに特徴が出ており注目される。<sup>(12)</sup>さらに、ここ六〇年の間に蓄積された考古学資料による地域的な視点からの研究もなされ、その好例である四川省の窖蔵から発見された一群の資料により、道教的な背景があることも指摘されている。<sup>(13)</sup>

二〇〇三年、台湾の国立故宮博物院で行われた「古色」という特別展にあわせたシンポジウムにおいて、宋代以後の銅器についても議論がなされ、二種類の復古現象が論じられた。すなわち「再創造的なもの」(Recreation)、<sup>(14)</sup>「骨董的なもの」(Antiquarianism)、<sup>(15)</sup>「倣古的なもの」(archaism)であり、その命脈は宋代以降千年の間つづいたと考えられる。<sup>(14)</sup>かい摘んで紹介すると、

「再創造的なもの」とは古物本来の用途、器形、文様を知るために意識的に模倣すること、「骨董的なもの」は偽物を作ることを目的にしていること、「倣古的なもの」は別の材質をもって銅器を写した作品を指している。

本稿は以上に紹介した研究成果をもとに、考古学資料を用いて、その出土状況、伴出資料、銘文、墓主の身分などを検討し、宋代における「三代銅器の意象」の再生と展開について踏み込んだ検討を行う。とくに、古銅器は「破棄」から「考古」、さらに「玩古」までの人々の意識的变化、その背後にあるスポンサー階級の社会的、経済的、政治的な層の拡大と変容、儒教、仏教、道教さらに民間信仰との融合、ひいては一般庶民の生活への影響などの側面から論を進めてゆきたい。文物資料と文献の記載を照らし合し、限られた考古学資料に基づき、宋代における「考古」から「玩古」への価値観の転換を見るのが本論の趣旨である。

中国の古銅器は商の時代から戦国を経て、漢の時代にはすでに下火になっていた。唐代には海外との交流が盛んに行われ、銅以外の材質、例えば漆、金、銀などで多くの器が作られ、また陶瓷器の製作と使用も一般的であった。唐から五代の間、古代の銅器はまれに世に出現しているもの、およそ「怪異の境」<sup>(15)</sup>のものとして認識され、研究するどころか、「散棄於山崖墟墓之間、未嘗收拾」<sup>(16)</sup>という悲惨な状況で無視され、宋代の初め頃になっても同じ状況が続いていた。

このような状況を宋初の士大夫が記載していたことは、逆に古代の銅器が脚光を浴び始めた証拠と言えよう。銅器は宋代においては偶然に発見されるだけでなく、意識的に求められ、所蔵され、研究され、さらには書籍として編集された。<sup>(17)</sup>それらの器形や文様、銘文なども写され、広く流布している。<sup>(18)</sup>また、同じ器形を銅、金、銀、玉などで作らせ、三代の意象を再生させた。

このように銅器ブームが宋代において再現され、その風潮が以後千年の間続いたのである。なお本文における「三代」とは、宋代の人々がよく用いた語彙であり、歴史王朝の商と周、そして未だ十分に確認されていない夏のことを指す。宋の人々はこれらの時代に深い憧れを持ち、「于今蓋二千有余歲矣」<sup>(19)</sup>とその古さ感嘆し、大いに「推崇」したのである。

呂大臨 Lu Dalin は『考古図』の序文において、「觀其器、誦其言、形容髣髴、以追三代遺風」と述べている。また翟汝文 Zhai Ruwen は、『忠惠集』の付録において「考礼於夏商之器、正字於鼎彝之間」と記した。さらに翟耆年 Zhai Qian の『鑑史』の「李伯時考古図五卷」では、「鼎彝之学」という名称が使われた。従って本文は宋代の言い方にならない、「追三代於鼎彝之間」と題して、「三代銅器の意象の再生」という歴史現象について考察を加える。

### 一、士大夫の新価値観と「三代銅器」への「考古」

古銅器が「散棄於山崖墟墓之間、未嘗收拾」の状態から、「三代至宝」へと変化した背景には、宋代初期の士大夫階級がそれらに新たな価値観を見出したことが関係している。呂大臨（一〇四六～一〇九二）は「士大夫」という言葉をもって古銅器の收藏者のことを呼んでいるが、それに寇準 Kou Zhun（九六一～一〇二二）、文彦博 Wen Yanbo（一〇〇六～一〇九七）、劉敞 Liu Chang（一〇一九～一〇六八）、蘇頌 Su Song（一〇一〇～一〇二一）、蘇軾 Su Shi（一〇三六～一〇一〇）、李公麟 Li Gonglin（一〇四九～一〇一〇六）、呂大防 Lu Dafang（一〇二七～一〇九七）ら三七人が含まれ、その所蔵となる青銅器の数は合計二三七器に上っている。<sup>(21)</sup> これらの面々を通観すると、いずれも当時の科挙合格者であったことが注目される。当時の科挙の試験はたいいてい「九經」、「五經」、「三礼」を内容としており、いずれも三代と関わりを持つ

ている。<sup>(22)</sup> それらの中に青銅器の名前や用途などが散見され、歐陽修 Ouyang Xiu（一〇〇七～一〇七二）は、宋の真宗の時には器への教養をも重んじていたと記録している。<sup>(23)</sup>

三代の銅器は、宋以前の隋唐時代にはおろそかにされたが、その原因はそれぞれの三代の經典への探求の態度に関係すると思われる。一般の讀書子は文字の記載を重視し、器への関心が乏しかったと言える。漢代の「独尊儒術」から隋唐時代の科挙制度の確立まで、三代の經典は人材選抜の主な拠り所であった。人々は經典や注疏などの「文字」、あるいは鄭玄が描いた後に歴代に修正が繰り返された礼図<sup>(24)</sup>を通して三代の銅器をある程度は理解したものの、その真偽を疑問視することはなかった。言い換えれば、文字への認知は文物そのものとは交わらない二本の線のようなものであったのである。宋の人は古銅器が山野に放棄されている状況を憂いており、「礼家伝其説、不見其形制」「名存実亡」<sup>(25)</sup>などの記述のうちにその様子をうかがい知ることができる。このような状況は宋の初めの聶崇義 Nie Chongyi の『三礼図』にまで踏襲されており、その図絵を見ると、図はあくまで「尊文釈器」のためのみにあるのであって、それが建隆三年（九六二）に宋の太祖に採用され、国学宣聖殿に描かれた至道二年（九九六）<sup>(26)</sup>まで変化することはなかった。

宋代の初期から呂大臨の『考古図』が完成する元祐七年（一〇九二）までの約百年の間に、古銅器に対する士大夫の態度には大きな変化があらわれている。新興の士大夫階級の劉敞、歐陽修、呂大臨などがその代表人物であり、三代の銅器を收藏、論述する動きが見られはじめたのである。すなわち、士大夫は古銅器を「散棄」の対象から「考古」の珍宝へと変身させ、銅器もこれによって人間の世に戻ることができたとと言える。

劉敞は科挙を通して進士になった人で、嘉祐六年（一〇六一）に翰林侍読

学士になった。その後、永興軍安撫使になり、長安 Chang'an に留まった<sup>(28)</sup>。彼は文字の中で「哀三代之愈遠」「三王之事、万不存一」と嘆いたが、赴任地が周の旧都の近くであり、その周辺で出土した銅器は思いのほか良いものであったらしく、彼は「于今蓋二千有余歲矣」とその古さに驚嘆し、「独器也呼哉」と賞賛を与え、「三代の至宝<sup>(30)</sup>」として重宝した。その後も彼は研究を続け、三代の銅器はその数が非常に少ないことを知った。そこでそれらを永久に後世に伝える方法を考え、「模其文、刻于石、並図其象」という手段を取り、「札家明其制度、小学正其文字、譜牒次其世諡<sup>(31)</sup>」とその目的を説いた。また彼は研究を通して従来の誤りを訂正し、文字を検証する重要性を改めて認識して、聶崇義の『三礼図』の誤りを指摘した<sup>(32)</sup>。このように、宋代の初めにおいて三代の青銅器を収集、研究する活動は士大夫階級に浸透し、彼らの嗜好や価値観にまで影響を与えた。例えば、劉敞は銅器の銘文が写された拓本を友人の欧陽修に贈ったところ、大いに喜ばれた。欧陽修は嘉祐四年（一〇五九）に書いた手紙のなかで、「発書驚喜失声」とその喜びの様子を記し、さらには「吾二人好惡之異如此、安得不成世俗所憎邪」と価値観を共有していることを強調し、士大夫としての教養を示した<sup>(33)</sup>。

劉敞が農夫や牧童の手から三代の銅器を「購入」する形で「三代の至宝」を手にしたことは、士大夫階級の間には波紋を広げた。その結果として、「追三代於鼎彝之間」という新たな価値観が形成された。この頃から、三代の銅器は墳墓から発見されると、経済活動を経て士大夫の所蔵するところに帰したのである。

劉敞を例にとれば、彼は臨江 Linjiang の新喻 Xinyu の出身であり、<sup>(34)</sup>『宋史』に慶暦年間（一〇四一―一〇四八）の進士として名を残している。<sup>(35)</sup>嘉祐元年（一〇六一）、彼は農夫から三代の銅器を購入し、都に運んだ。当時の状況は

欧陽修によって紹介され広く知られているが、その数は実に多く「所載盈車」に達するほどの量であったようである。『考古図』を見ると、彼の持っている一一点の器、それらの出土地は西周の都、周原 Zhouyuan あたり、扶風 Fufeng、藍田 Lantian、さらには西北の韓城 Hancheng に及んでいる<sup>(36)</sup>（挿図1）。これらの銅器にはいずれも銘文があり、その図絵された器形や文様などから見て、周の縞京 Goujing あたりの特徴を示している（挿図2）。

劉敞は『先秦古器記』<sup>(37)</sup>を著したが今日まで伝わっておらず、『集古録』にその銘文を見るのみである。しかし『考古図』にはその文字と図絵の両方が残っており、宋代の士大夫コレクターの一面を示す好資料となった。

もう一人のコレクターは李公麟（一〇四九―一〇六六）である。彼は舒州 Shuzhou の人、進士になった後、南康、長垣尉、泗州録事などを歴任した。<sup>(38)</sup>京城に官職を移してから中書門下後省刪定官、御史檢法などを務めた。『考古図』は彼のコレクションである二五品の器を収録し（挿図3）、そのうちの「己拳爵」、「父己人形彝」、「獸環細文壺」、「戈」<sup>(40)</sup>はいずれも南方の寿陽紫金山 Zijinshan から得ており、<sup>(41)</sup>恐らく南方に行った際に入手したものと思われる。これらは後に呂大臨の鑑定を受け、『考古図』に収録された。現在の知識に基づいて見れば、「戈」には鳥虫書の銘文があり、南方地域の特徴を帯びている。以上の器以外のものはおおそ京師で得たものであり、<sup>(42)</sup>それぞれの来歴が記されている。『宋史』によれば李公麟は、「聞一妙品、雖捐千金不惜」<sup>(43)</sup>と古器の収集に財を投じることを惜しまなかった。その収集と研究の結果、三代の銅器を集めた『考古図』<sup>(44)</sup>が誕生したのである。

また、蘇軾（一〇三六―一一〇一）は眉州 Meizhou の眉山 Meishan の出身、嘉祐二年（一〇五七）の進士である。彼は除大理評事、簽書鳳翔府判官を務めた頃、<sup>(45)</sup>終南山付近から一つの古敦を手に入れ、これを見た欧陽修は「終南



「古敦」と名づけた。さらに歐陽修は、これをもって『三礼図』の図絵の不正確な箇所を指摘している。<sup>(46)</sup>この器に関しては、呂大臨の『考古図』に収録されていないため詳細は不明であるが、蘇軾が収集したほかの一点の器「楚邛仲嬭南和鐘」<sup>(47)</sup>（挿図4）が取り上げられ、錢塘（Qiantang）から得たと記した。あるいは、蘇軾が杭州 Hangzhou に行った時<sup>(48)</sup>に入手したものかもしれない。

さらに、文彦博（一〇〇六～一〇九七）は汾州 Fenzhou の介休 Jixiu の出身、天聖五年（一〇二七）に進士になった人で、彼の所有する「王子呉鼎」などの一二点の器が『考古図』に収録されている。<sup>(49)</sup>そのうち、五点の器の来歴がはっきりせず、<sup>(50)</sup>ほかの「王子呉鼎」、「仁旅鬲」、「单伯彝」、「伯玉叔盃」、「季姬匱」はいずれも京兆で入手している。京兆府は永興軍節度に属し、すなわち今の長安に当たる。<sup>(51)</sup>『宋史』によれば、文彦博は至和二年（一〇五五）に自忠武軍節度使、檢校太尉兼知永興軍の位にあって、<sup>(52)</sup>その時にこれらの器を入手したと推測される。ほかの器の来歴に関しては、鄴郡覃甲城 Tanjiacheng、栄陽 Rongyang、京師 Jingshi、洛陽 Luoyang などの場所が挙げられる。<sup>(53)</sup>

劉敞、李公麟、蘇軾、文彦博らはいずれも士大夫にして古銅器のコレクターとなっている。彼らの経歴を見るといずれも進士の出身であり、のちに官僚となり各地を転々とし、その間に銅器を入手していたのであった。このような状況は、まさに蔡襄 Cai Xiang が「今之仕者、東西南北或千万里」<sup>(55)</sup>と述べているように、広い活動範囲を可能とした士大夫の特権であり、三代銅器も彼らとともに各地に流通することになった。

科挙制度から生まれた士大夫階級は、五代の時に比べると焚香礼進士のよくな礼を受け、より高い政治地位を得ることができた。<sup>(56)</sup>宋初において、彼らは三代を継承することを標榜し、儒家の復興を目指し、漢唐以降の仏教と道教が隆盛する状況を変えようとした。そのような中、三代の銅器はまさに三

挿図2 劉敞収藏品（呂大臨『考古図』より）



挿図4 蘇軾收藏品  
(『考古図』より)

代を象徴する恰好なシンボルとして脚光を浴び、これらに財を投じて収集したのが士大夫であった。李公麟の場合には、「聞一妙品、雖千金不惜」とその様子が記されている。北宋前期、宰相の月俸は三〇〇貫であるのに対し、県令は一〇貫から二〇貫しかなかった。<sup>(57)</sup> 彼らの全てが三代の銅器を学問的に研究するのではなく、蘇軾のように「古器縦横猶識鼎、衆星錯落僅名斗」と<sup>(58)</sup> いうような人もおり、「爵」と「鼎」の違いを明白に区別できなかったとも伝えられている。<sup>(59)</sup> しかし士大夫階級の彼ら、とくに文彦博、寇準に至っては三代に関する論述も多いことから、本稿においては彼らを「第一類士大夫」と呼ぶことにする。彼らの手によって三代の銅器がはじめて収集され、研究の草分け的存在にもなったのである。

士大夫は三代から二千年も離れた宋代において銅器を収集し始め、その研究意欲が大きく刺激された。すなわち、三代の知識が器を通して具現化され、史書の誤りを正す面においても大きな役割を果たした。劉敞と李公麟はそれぞれ『先秦古器記』と『考古図』<sup>(61)</sup> を著し、「第二類士大夫」の代表人物となった。三代の銅器を通じて、劉敞の言うところの「礼家明其制度、小学正其文字、譜牒次其世諡」と三代の学問の各分野への追究が行われ、やがてそれが金石学の金学部分として体系化されることになった。その結果、同時代の鄭樵 Zheng Qiao が著した『通史』には「金石略」という部分が新たに設けられ、<sup>(62)</sup> 金石の類が紹介されている。

このような士大夫の三代銅器を収集する動きは、多くの専門家を輩出している。呂大臨はコレクターではないが、張載と二程に学び、程門四先生の人として名を連ねた。とくに六経に精通し、礼家として世に知られるようになった。<sup>(63)</sup> 彼は三七人の所蔵家から二七三点の銅器を集め、「觀其器、誦其言」<sup>(64)</sup> をもって三代の銅器を理解し、さらに三代の遺風を追慕することを目的として、金石学を系統的に組み立てた。「探制作之原、補経伝之闕亡、正諸儒之謬誤」を研究の問題所在にした呂大臨は、いわば「第三類士大夫」としての分類ができる。彼は道家が儒家に向けた「遂跡喪真」の批判に反論して、「遂跡」と「玩物」との違いを力説し、儒家の「考古」の正当性を強調した。<sup>(65)</sup> 宋初において、士大夫の「遂跡」と「玩物」に対する態度は、その後にもしばしば登場する論題となった。<sup>(66)</sup> ただし、彼らは三代の銅器の「物」としての部分を意識的に回避し、「玩物」と一線を画そうとした。そのため、三代の青銅器の造形的な問題への言及はあまりなく、その分野の議論を南宋の「塵外之客」に残す格好となった。

士大夫のうち、歐陽修は「遂跡」について闊達とした分析を加えた。彼は古い「物」の収集について、「好」と「力」の両方の結合が不可欠であると説いた。士大夫が「三代の鼎盤」を好んで収集する行為は、世間俗人が「金玉珠璣」を愛でるのと根本的に異なり、むしろ自分ら独自の価値観が反映されるものと自負した。さらに、流传する古器を後世に伝える手段として、書物に編纂するのが有効な方法と気付いたのである。<sup>(67)</sup>

総じて言えば、宋の初めにおいては儒家が台頭する時代背景があり、<sup>(68)</sup> 経学の分野においても漢代や唐代の注疏を超え、三代の經典の原文に接することの重要性が強調された。また文学においても、韓愈 Han Yu に代表される古文運動が一世を風靡した。このような背景のなかで、三代の銅器が士大夫ら

に発見、珍藏、研究されたのは自然な流れであったと言える。また士大夫らが交流するなかで、これに関わる話題が相当な部分を占めていたと考えられる。広汎な知識と卓越した見解を持つ者は人々から尊敬され、皇帝も例外ではなかった。ただこのような三代の銅器を重んじる風潮は、あくまで礼と礼器への関心のあらわれであり、器に即した研究が行われることはなかった。沈括 Shen Kuo (一〇二九～一〇九三) は天文学の分野で優れた功績を残しているが、彼もまた自分が所蔵する三器を著書中の「器用」部に分類して紹介している。<sup>(69)</sup> 残念なことに、彼も科学技術の視点をもってそれらを見ることはなかった。古銅器を技術面から議論するのは、明末の宋応星 Song Yingxing の『天工開物』を俟たなければならぬ。この『天工開物』の序に「大業文人棄擲案頭的知識」「于功名進取、毫不相關」<sup>(70)</sup>とあるように、やや自分を皮肉る態度は実に宋代の認識を受け継いだものと言える。

当然のことながら、士大夫の三代の銅器との接し方は、「所蔵」と「研究」とどまるものではなかった。彼らによって真なる三代の意象が把握され、地方州県で行われる孔子を祭る「祭孔」の儀式に生かされたのである。これによって三代の意象は、士大夫の「私有領域」から「公共場域」へと広められたのである。そのなかで、朱熹 Zhu Xi (一一三〇～一二〇〇) は非常に重要な役割を果たしていた。唐代以来、孔子の地位が高められ、各州県で孔子廟の建設が進められていた。その祭器や儀式などを論じたものが、『大唐開元礼』に収録される「諸州積奠於孔宣父」<sup>(71)</sup>である。宋代に至っては祭孔の儀式がより隆盛し、その地位はますます高くなった。<sup>(72)</sup> 『政和五礼新儀』に「州県積奠文宣文儀」<sup>(73)</sup>の文字の部分を残し、このような時流のなかで、朱熹は淳熙六年(一一七九)に「彩画図本」を手にして、その寸法を詳しく査定した。また、彼は政和年間に中議局が作成した祭器の図絵をよしとし、三代を忠実

に再現したものと評価した。<sup>(74)</sup> さらに祭孔にあたっては『紹熙州県積奠儀図』を手本に定め、「豆」「簋」「簋」「犧尊」「象尊」「太尊」「著尊」「壺尊」「洗罍」「洗」「爵」「龍勺」など一二種類を主な祭器とした(挿図5)。

このようにして定められた祭器は、祭孔の儀式の普及とともに広がり、朱子学の隆盛によってますます影響力を持つようになった。宋代の祭孔の際に使われた祭器の発掘報告はまだないが、元、明代のそれに該当する資料が知られている。例えば、現在、湖南省博物館に所蔵される「大元大徳」<sup>(75)</sup>亥年(一二一九)の年号を持つ文靖書院の祭器一群には、八点の「簋」(挿図6)、四点の「豆」が含まれており、宋代の形式を大まかに継承している。また、台湾の国立故宮博物院にも「至正二十六年」(一三六六)の年紀銘を伴った泳澤書院の祭器(挿図7)があり、やはり三代の意象を写している。さらに、『朝鮮王朝実録』の「世宗実録」にも「祭器図説」(挿図8)がある。「朱文公積奠儀」<sup>(77)</sup>からとったことが明記された図絵であり、隣国への影響の一端が示されている。このほか、大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵される朝鮮王朝時代の青瓷簋(挿図9)や簋、韓国の新安海底から引き揚げられた文物のなかには銅器(挿図10)と瓷器があり、いずれも注目される資料である。なお、四川省の大竹 Dazhu で発見された窖蔵からも、大竹県の県事である劉永成 Liu Yongchen が作らせた祭孔の祭器、一四三点(挿図11)<sup>(80)</sup>が出土しており、明の弘治乙丑年(一五〇五)という年代が知られている。

挿図5 簋図(朱熹『紹熙州県積奠儀図』より)  
挿図10 銅器(四川省大竹窖蔵)

挿図 6-a 簋 大元大徳己亥年 (1299) 銘  
中国、湖南省博物館

挿図 6-b 同 銘文

挿図 7 泳澤書院銅祭器 至正二十六年 (1366) 銘  
台湾、国立故宮博物院

挿図 8-b 同 (拡大)

挿図 8-a 簋図 (『朝鮮王朝実録』より)

朱熹の提唱により、孔子廟や書院などの儒教の施設が「三代銅器の意象」を普及させていた。これにより、士大夫は単なる「所蔵」と「研究」の域を超え、地方官僚としての身分からこれを推進することになった。<sup>(81)</sup> このような地方へと普及する流れの中、三代の銅器の意象が選択された。儒家の象徴という性格をより明確にすることができたからであり、<sup>(82)</sup>それが科挙制度の継続とともに、より大きな力を發揮することになる。

挿図9 青瓷簋 朝鮮王朝時代 大阪市立東洋陶磁美術館

## 二、皇室の新たな価値観と倣古

宗教的権力を握った教皇ユリウス二世やイノセント八世、法王フランソワ一世らは、一六世紀の欧州の銅像にローマ彫刻を復活させるのに重要な役割を果たしていた。<sup>(83)</sup> それと同様に宋の皇帝は、三代の銅器を当代に再生させるのに有力なスポンサーとなった。祭器は皇室の祭典にとって欠かせない存在であると同時に、社会、君臣の秩序を立てる上にも大いに力を発揮できた。この点に関して言えば、徽宗皇帝はとくに重要人物として挙げることができ<sup>(84)</sup>る。彼のとった行動はそれまでの漢唐の皇帝と一線を画すものであった。

事実、五代の戦乱を経た社会は疲弊し、その政治秩序、社会秩序を立て直

挿図10 倣古銅器（新安海底遺物）

すことが宋代の皇帝にとっての関心事であった。<sup>(85)</sup> 皇権至上の尊厳は言うまでもなく、儒家の三代の規範に基づき、社会の各階層の尊卑序列が士大夫のもとで立て直されることが急務となった。そのため、宮廷は一連の儀礼を定め、それに取り組んだ。太祖の時は、聶崇義の『重集三礼図』『開宝通礼』『通礼義纂』を用い、仁宗の時は『礼閣新編』『太常因革礼』などを、神宗の時は『朝会儀注』を、そして、徽宗皇帝の時は『五礼新儀』を、それぞれテキストにして儀礼の立て直しを図った。<sup>(86)</sup>

ただ、儀礼を重視するのは、その祭器が古意に適うかどうか、さらには、まとまった三代の銅器のコレクションを所有するかどうかとは必ずしも結びつかない。宋の初め、太祖はもろもろの祭器をもって祖先を祭る場面を目に

挿図11 祭孔祭器 弘治乙丑年（1505）銘 四川省大竹

挿図12-a 政和鼎 政和元年 (1116)  
台湾、国立故宫博物院

挿図12-b 同 銘文

し、「籩豆簠簋」などの器を正確に認識することができず、先祖もきつと識別できないだろうという理由から、これらの撤去を命じた。<sup>(87)</sup>これは非常に興味深い記録であり、聶崇義の『三礼図』を基準に典礼制度が定まったのはこれ以後のことであろう。一方、仁宗皇帝は三代の銅器を大いに好んだが、その入手経路については詳らかではない。<sup>(88)</sup>皇祐三年(一〇五一)、宮廷はすでに三代銅器を所有し、「秘閣」や「太常」に納めて所蔵していたが、その数は

わずかに一一点の器にとどまり、士大夫のコレクションの規模とあまり変わらないものであった。<sup>(89)</sup>

徽宗皇帝(一〇八二〜一一三五、在位一一〇一〜一一二四)の時、状況は一変した。彼は強大な政治力と財力を駆使し、自ら三代の銅器の最大のコレクターになったばかりでなく、当時の銅器の復古にも力を入れ、その最大のスポンサーにもなったのである。『重修宣和博古図』の刊行や、現存する「政和鼎」(挿図12)や「大晟編鐘」(挿図13)などの作品がそれを雄弁に語っている。

徽宗皇帝の目を三代の銅器に向かわせたのは、当時の兵部侍郎充議礼局詳議官を務める薛昂 Xue ang である。大観三年(一一〇八)、「有司所用礼器如尊爵簠簋之類、与大夫家所藏古器不類」という事実を徽宗皇帝に報告したのがきっかけであった。それ以後、徽宗皇帝は大々的に三代の銅器の収集に熱意を燃やし、各地方州県にまで令を出し、「宜博訪而取資」とその入手に努めた。「委守令訪問士大夫或民間有收藏古礼器者、遣人往詣所藏之家、図其形象、点検無差誤、申送尚書省議礼局、其彩繪物料」とした過程を経て、最終的には『重修宣和博古図』として実を結ぶことになった。<sup>(90)</sup>この作業は当時使用していた祭器に生かすことが目的で、「三代の古物」に合致しているかどうかを徽宗皇帝の関心の所在であった。また、「政和鼎」を寵愛している臣下の童貫 Tong Guan に下賜するなど、臣下の忠誠を促し、その家廟制度にも反映された。<sup>(91)</sup>このような状況は南宋まで受け継がれ、「紹興豆」(挿図14)の存在がそれをよく示している。

注目すべきは、徽宗皇帝にとって、三代の銅器は儒家の解釈に終始するだけのものではなく、道教の色彩を盛り込んでいた点にある。彼は崇寧年間に蔡京 Cai Jing を重用し、いわゆる元祐の「奸党」を取り除いた後、<sup>(93)</sup>崇寧二年

挿図13-b 同 上面

挿図13-a 大晟編鐘（蕤賓鐘）  
崇寧四年（1105）銘 台湾、国立故宫博物院

（一一〇四）に九点の鼎を、同八年には九点の神雷鼎を鑄造させている。<sup>(94)</sup>この行動は道教の方士・魏漢律 Wei Hanlu と王仔昔 Wang Zixi の案によったものと伝えられ、そこには「百物之象」をかたどり、方位、色彩、時刻に合わせ祭りが行われた。さらに、蔡京は崇寧二年にその定鼎大臣となり、徽宗皇帝自身も九鼎の祭祀の儀式にしばしば百官を連れて足を運んでいた。このことについて、『宋史』は徽宗皇帝の道教推崇の文脈で取り上げており、蔡

京の息子である蔡條 Cai Tao も当時の様子を「千余鶴飛来、雲為之变色」とその奇異な情景を記している。徽宗皇帝のこの一連の行動によって、三代の銅器の意象に新たな非儒教的なものが加えられた。その意象の再生は、徽宗朝の君臣によって拍車がかけられ、関わった人物に蔡京、王黼 Wang Fu、薛昂、梁師成 Liang Shicheng、童貫などを挙げる事ができる。

なお、『重修宣和博古図』と『考古図』との違いは、前者においては三代

挿図14-a 紹興豆 紹興丙寅年（1146）銘 台湾、国立故宫博物院

挿図14-c  
同 銘文

挿図14-a 同 背面

南宋  
磁器觚  
老虎洞  
中国浙江省杭州、

の銅器に当時の人々の想いが盛り込まれたところにある。それを端的に示したのが鼎への解釈である。「圓以象乎陽、方以象乎陰、三足以象三公、四足以象四輔」<sup>(96)</sup>と官僚のイメージをその器形に投影し、三代の銅器の意象をより現世利益的なものにさせた。このような流れの中、三代の銅器は人々にとつてより身近なものとなり、士大夫、皇室からやがて庶民へと裾野の広がりが可能になった。そのため『重修宣和博古図』は南宋、すなわち三代の銅器が戦乱によって紛失した後になっても、復古の際には絶大な役割を果たしたのである。

南宋に入ると、宮廷は『重修宣和博古図』に照らし合わせ、青瓷をもって三代の銅器を写した<sup>(97)</sup>。近年、浙江省杭州の烏龜山 Wuguisshan 窯跡<sup>(98)</sup>と老虎洞 Laohudong 窯跡<sup>(99)</sup>の発掘が行われ、銅器の器形を持つ瓷器を多く出土している。その中には、三代の銅器の意象を持つ鼎、鬲、觚（挿図15）などが見られ、注目を集めている。研究者の多くは、南宋官窯の背後に宮廷が深く関与したことを指摘し、そのため、水準の極めて高い作品が焼かれ、銅器に見られない美的境地に達したのである。

### 三、三代の銅器の意象の展開 ——スポンサー層の変化と使用層の拡大

(一) 儒家から仏教、さらに民間信仰へ

士大夫と宮廷に関わる文献が多く残されているため、これまでの研究は三代の銅器を儒家の文脈から解釈したものがほとんどであった。しかし、近年の考古学の進展から得られた資料により、それ以外の視点、すなわち士大夫と皇帝以外の人々へもまなざしを投げかけることが可能となっている。ここで信仰世界の側面からこの問題を探ってみたい。

#### 1 仏教の脈絡

宋の初め、仏教は儒教の要素を取り入れようとした<sup>(101)</sup>。注目すべきことに、呂大臨が三代の銅器を訪ねた所蔵先の一覧には、仏教寺院の法相院も含まれていた<sup>(102)</sup>。寺院が古物を所有する例は、河北省の定州 Dingzhou 五号塔基の静志寺址に戦国から前漢の玉璧が出土したことからも分かるように、稀なことではなかった<sup>(103)</sup>。器の形に着目すると、香炉の変化が挙げられる。宋代とそれ以後の寺院で使われた香炉は、唐代のそれと器形においてはっきりと異なっているのである。一例を挙げると、同じく河北省において、五代から宋の初めとみられる正定舍利寺の塔基地宮から出土した三彩の香炉<sup>(104)</sup>（挿図16）は、三代の鼎の形に近い双耳を持ち<sup>(105)</sup>、隋唐代のそれとは異なる器形を成している<sup>(106)</sup>。

金銀器の場合、唐代の金銀器は外からの影響が著しいが、それに対し河北省定州の五号塔基から発見された宋代の香炉である「銀製鍍金香炉」<sup>(108)</sup>（挿図17）と「白瓷蓋付五足香炉」<sup>(107)</sup>（挿図18）を見ると、後者は唐の様式をよく留めて

おり、法門寺の香炉（挿図19）の器形に近い。<sup>(109)</sup>これに対して前者の銀製鍍金香炉は三代の意象を持ち、太平興国二年（九七七）に比丘尼の智超ら一人と女弟子である劉氏ら一四人の発願である旨が銘文に記されている。このように見ると、高級な存在である金銀器の世界においても、僧侶と女信者がその中心となり発願が行われ、三代の銅器の意象が儒教以外の仏教の分野でまで浸透してきたことを示している。なお、唐代の法門寺の場合と異なり、こ

挿図16 三彩香炉 中国河北省正定  
舍利寺 塔基地宮出土

挿図17 銀製鍍金香炉  
中国河北省定州 五号塔基出土

こにスポンサー層の拡大という変化も看過できない。

事実、五足の香炉（挿図20）から三足の鼎式炉（挿図21）への変化は、耀州窯の青磁にもつともよくあらわれている。陝西省の銅川耀州黄堡鎮 Huangbaozhen の窯跡からの出土資料を見ると、北宋晩期から南宋へかけてのその変化がうかがえる。<sup>(110)</sup>また、三足の香炉の文様も器形に応じており、銅器によく見られる「雷文」、「芭葉文」、「釣連雷文」などが頻繁に登場している。<sup>(111)</sup>さらに窯跡からは、仏像、飛天、羅漢、力士、供養人、僧などの仏教的な文様が多く発見され、これらに加えて道教関係の文様である鶴や仙遊人物なども散見される。<sup>(112)</sup>なお、文様の余白に、「大観」、「熙寧」、「政和」など年号のあるものもあり、宮廷との関わりもうかがわせる。それを裏付けるかのように、文献によれば天聖年間（一〇二三～一〇三二）、宮廷が五百器の耀州窯の香炉を行道者に下賜したとある。<sup>(113)</sup>このように、陶瓷器をはじめ、銀器を含めた分野においても、宮廷が推奨する三代の銅器の意象が大きく展開したのである。耀州窯の香炉の器形に見られるように、三代の鼎式炉への変化は、仏教、道教、民間信仰に三代の意象が浸透した事実を端的に示している。

挿図18 白瓷蓋付五足香炉  
中国河北省定州 五号塔基出土

挿図19 香炉 中国陝西省扶風 法門寺

挿図20 五足香炉 中国陝西省耀州

挿図21 三足鼎式炉 中国陝西省耀州

挿図22 焚香図 中国四川省広元

る。発掘報告者が「炉」と称したこの器の左側にはこれを拝む人物が表現され、これを「敬香人」としている。器の大きさは人間のおおよそ半分にまで達しており、そのとなりに「神碑」のようなものや波文様の「潮水」などがあり、興味深い文様構成となっている。<sup>(14)</sup> 文様がはっきりしない部分もあるため、これを詳細に考察することは困難である。人物がその鼎式の香炉に腰を曲げて礼拝しているのは確かであるものの、どのような民間信仰の場面を表現しているのかはにわかに判断しがたい。また伴出資料に買地券二点が確認されており、墓主は杜光世 Du Guangshi という男性で、享年五〇歳にして、慶元元年（一一九五）に埋葬されたことが判明している。

残念なことには、伴出資料である買地券の銘文がはっきりしないため、杜光世の社会的地位が特定できていない。ただ、浮彫りには男女の人物や武士の姿、四方四神なども見られ、地域色を濃厚に出している。この作例は、南宋の一二世紀において鼎の意象が士大夫や宮廷の手から民間へと浸透し、四川省の人々が親しみをもってこれを受け入れたことを示している。

さらに、宋代の印刷技術の賜物である版画の「天竺靈籤」は、より明白に鼎が民間信仰への普及した様子を伝える。<sup>(15)</sup> 総計八六枚の籤のうち八枚に鼎の意象が描かれており、いずれも卓上に置かれ煙が上がっている。例えば第一九籤は「家道生荆棘、兎孫防虎威、春前祈福原、方得免分離」とあり、鼎が神への祈祷とその象徴になっている（挿図23）。また、第二八籤には「意速無船渡、波深必誤身、切須回旧路、方可見災屯」と記され、鼎の中に「願」の一字が入れられている。第七一籤には一本の足の折れた鼎を描くとともに、「卦中塔未安相輪、主其事不円備、鼎缺足乃不穩也」と解説がなされている（挿図24）。

鼎を民間信仰の場で用いる習慣は、遅くとも南宋の時代には始まっていた。四川省の広元 Guangyuan にある宋墓の墓室東壁の浮彫りに「焚香図」（挿図22）があらわされており、ここに三足と双耳を持つ鼎式の香炉が登場してい

## 2 民間信仰

鼎を民間信仰の場で用いる習慣は、遅くとも南宋の時代には始まっていた。

四川省の広元 Guangyuan にある宋墓の墓室東壁の浮彫りに「焚香図」（挿図

22）があらわされており、ここに三足と双耳を持つ鼎式の香炉が登場してい

事実、鼎のみが仏教徒の仏に祈る法具という訳ではなく、南宋の時代にお

いては簋に器形の似ている器も祈福の象徴となっていた。浙江省の寧波 Ningpo の天封塔からは、このような銀製の器が発見されている<sup>(16)</sup>。高さはわずか八・二センチ、口径が八・六センチと小ぶりの作例であるが、銘文から仏教を信仰する女性信者の倪氏廿一娘 Nishi Nianyang が、紹興一

挿図23 天竺靈籤第一九図

四年(一一四四)三月八日、六二歳の年にこの天封塔の地下宮殿へ献納したものとわかる。

この倪氏廿一娘をはじめ、鄭十一娘子 Zheng Shiyinangzi、徐氏十二娘子 Xu Shieriangzi など、天封塔へ奉納を行った一群の女性信者が知られている<sup>(17)</sup>。先行研究によれば、北宋の時代から女性信者は好んで仏教の経典を読み、「元豊(一〇七八―一〇八五)、元祐(一〇八六―一〇九三)間釈氏禪家盛、東南仕女紛造席下、往往空閨門<sup>(118)</sup>」や「晚好仏書、知縁果大略、怡然若有得<sup>(119)</sup>」とその流行ぶりを伝える<sup>(120)</sup>。それを裏付けるように、北宋の孫四娘 Sun Siniang の墓から仏教と道教の経典が計一巻も発見されている。この風潮は南方にとどまらず、河北省の定州においても、高さ二五・五センチに達する香炉が男性信者一人と女性信者四人の共同発願によって制作されている。男性が儒教の科挙を通して官僚になり、三代の銅器の意象を普及させるのに対し、女性は仏教への敬虔な信仰のなかで、宗教の世界に意象を投影させたのである。

三代の銅器の意象は宋代の儒教のなかで再生されると同時に、仏教や道教のなかでも役割を果たした。さらに民間信仰への浸透も認められ、南宋の初

挿図24 天竺靈籤第七一図

挿図25 銀香炉 浙江省寧波

九八七)のことであった。黄公度 Huang Gongdu (一一〇九—一一五六)の『枯木肇靈』<sup>(122)</sup>と廖鹏飞 Liao Pengfeiの『聖墩祖廟重建順濟廟記』<sup>(123)</sup>という宋代の二つの文献によれば、媽祖のシンボルは筏、すなわち「枯槎」である。しかし、その後の劉克莊 Liu Kezhuang (一一七八—一二六〇)の『風亭新建妃廟』では、「元符初水漂一炬」<sup>(124)</sup>に変貌し、「香炬」もそのシンボルとなっている。さらに清代には、その両者がそれぞれ「枯槎顯聖」と「銅炉溯流」と並び称され、図に描かれている(挿図26、27)。ただし、三代の銅器の意象が南宋の媽祖信仰に浸透していたかどうかは、なお詳察する必要がある。

## (二)「窖藏」に見る三代の銅器の意象

三代の銅器は民間信仰の中に姿をあらわすのに留まらず、考古学上の分類で言うところの「窖藏」にもあらわれている。とくに四川省では、元との戦乱のために珍宝を地下に埋めるということが頻繁に行われていたが、戦乱の要因以外に道教をはじめ、仏教や儒教とも関りを持つと指摘されている。

### 1 道教の脈絡

道教との関係に言え<sup>(125)</sup>ば、劍閣の八カ所の窖藏のうち、渠城小東街群に説得力のある資料が得られた。銅製の大きい二点の瓶、一点の小瓶、三点の磁碗、それに一点の銅印(挿図28)が発見され、その印文には「道経師室」とある。これは「仏以仏法僧為旨、道以道経師為義」<sup>(126)</sup>に由来し、ここから推測してこの三点の瓶は道教の「道経師」との関連が窺える<sup>(127)</sup>。

三点の銅瓶(挿図29、30、31)は一〇センチから五〇センチまでと大小さまざまであるが、大型の二点は三代の「壺」よりも同時代の陶瓷器の花瓶に近い器形と言える。この二点は二つに分けて鑄造されており、一体で形成さ

めに顕著となった。その時期に、人から神へと変貌を遂げたいくつかの民間信仰があり、宮廷もこれらを認める態度を取り、祠が建てられた<sup>(121)</sup>。

媽祖信仰はまさにこのような軌跡をたどったものである。南宋の文人の記したものによれば、媽祖とは北宋に生きた女の林默娘 Lin Moniang (九六〇—

挿図27 銅炉溯流図

挿図26 枯槎顯聖図

れている三代のものとは異なっている（挿図32）。ただし、環を銜える獸耳の造形は三代によく見ることができるとあり、非常に手間のかかるつくりである。小型の瓶（挿図29）にあらわされている円形の雷文や夔龍文などは、いずれも三代の文様に認められるが、そこには宋人ならではの取捨選択があったように思われる。いずれにしても、この一群の資料は道教との関わりが明白であり、持ち主が道士であったのか、あるいは「道観」と称される道教寺院が所有したものなのか、多くの課題を残している。ただ言えることは、南宋の壺や瓶などの器制や、獸面紋、雲雷文などは、道教信仰と関係づける

挿図28 銅印 中国四川省 劍閣窖藏  
(县城小東街)

挿図29 銅瓶 中国四川省 劍閣窖藏  
(县城小東街)

挿図32 二つに分離する銅瓶 (同右)

挿図31 銅瓶 中国四川省 劍閣窖藏  
(县城小東街)

挿図30 銅瓶 中国四川省 劍閣窖藏  
(县城小東街)

挿図35 無底銅瓶 中国四川省 劍閣窖藏

挿図33 中国四川省 劍閣窖藏

挿図34 中国四川省 劍閣窖藏

挿図36 中国四川省 閬中窖藏

ことが可能であろう。これら劍閣の八カ所の窖藏は、大型に作られ丹念に裝飾されたものと、薄造りで、往々にして底が無く裝飾の少ない小銅瓶とに分けられる(挿図33、34)。そのなかで白龍公社燈塔村と白龍村から別々に出土した二つの群からは、筷子や湯匙、燭などが一緒に見つかっている。これら三代銅器と深い関係を持つ器群と、簡易な裝飾の器群がどのような関係にあるのか、また、道教の系統に属するのか他の民俗信仰に関係するのかは、今後の検討を要する。ただ、薄造りで裝飾の少ない器群のなかには、底の無い小型の銅瓶(挿図35)が含まれている。同じく四川省の間中 Langzhong から、燭や匙、筷子、銅製の鶴、匱型の薄形銅器が出土しており(挿図36)、三代と関係の深い銅製の觚や磁器製の鼎なども一緒に発見されている。<sup>(128)</sup>その

なかの銅瓶の一つには文様裝飾が伴っており、その円渦紋、円形雷紋や作風が剣閣の大瓶に近い。これら精粗、大小の差を持つ品々が共に道教で用いられたものなのか、身分の差を示すものであったかは、今後の研究を俟たなくてはならない。

## 2 儒家の脈絡

注意すべきことに、四川省で発見された窖藏には道教の要素以外、すなわち儒家とも関連があるように思われる。江油窖藏<sup>(129)</sup>の場合、剣閣 Jiangge の小東街窖藏と同様、五点の銅印（挿図37）が発見されたが、解説が困難な一点を除き、残りはいずれも儒家的な文言である。例えば、「読書得新功、来雁寄寸字」「進徳修業」などがそれに当たり、「天迎雲□」の鼎形印なども宋代流行の形を取っている。この頃は文人の間でも、三代の意象を用いて印章を作っていた。<sup>(130)</sup> 例えば、劉叔剛 Liu Shugang の「桂軒印」（挿図38）や「叔剛印」が挙げられる。そして大型の「延陵郡記」（挿図37—1）の書体は九疊篆になり、宋代の中高級の官僚が持つ印鑑になる。<sup>(131)</sup> 「延陵」の場所は、『宋史』の「地理志」によれば両浙路の丹陽にあたり、「寧熙五年、省延陵県為鎮入焉」<sup>(132)</sup>の

挿図37 印文（四川省江油窖藏発掘品）

とある。もし、「延陵郡記」の所有者が窖藏の主人であれば、「延陵」と縁のある人物が推測され、あるいは剣閣地域以外の人の可能性もある。同じ窖藏から出土した将棋や墨、硯なども、当時の人々の生活の一面を窺わせてくれる。当時の百科全書とも言える『事林廣記』には「碁局篇」があり、生活の嗜みとして紹介されていた。<sup>(133)</sup> また、墨、硯、筆、燭台、銅匙なども司馬光の『書儀』<sup>(134)</sup> や朱熹の『家礼』<sup>(135)</sup> に登場するものであり、これらの書物は一般庶民の日用の礼書として広く流布していた。湖南省の常清黄土山 Huangtushan にある黄石墓からも石硯と銅器（挿図39）などが発見されており、<sup>(136)</sup> いずれも当時の読書子の愛好するものとして理解できよう。

このように見てくるならば、当窖藏の主人は地方にいる儒家士紳、あるいは裕福階層の出身の可能性が高く、三点の鼎と一点の爵（挿図40）など三代の意象に富む器は、儒家の脈絡からの理解が可能であろう。とくに鼎と爵の器形や文様は、『事林廣記』<sup>(137)</sup> の中に登場する図（挿図41）と近い特徴を有している。

挿図38 印文（桂軒印）

挿図39 銅器 中国湖南省常清黄土山黄石墓出土

挿図40 爵および鼎 中国四川省 江油窖藏

3 仏教の脈絡からの推測

彭州 Pengzhou から発見された窖藏<sup>(138)</sup>も看過できない。発見された銅器は大型のものが多く、器形や文様において、三代の銅器を強く意識していた点は特筆に値する。例えば器形からは瓶以外に、甗（挿図42）、壺（挿図43）、鼎、鬲などの三足を持つ複雑な器形をなす器が発見され、高さが五〇センチほどの甗や壺は二段に分けて鑄造されており、手の込んだものである。その文様には各種の雷文や獣面文が表されている。夔龍文や夔文、芭蕉葉文（図44、45）も見られ、剣閣の小東街 Xiaodongjie の窖藏から発見された銅器の文様よりも豊富である。

さて、これら三代の銅器意象を色濃く出した窖藏の主人とはどのような人物であったろうか。彭州博物館の館長によると、発見当時、ある器のなかから二体の仏像が見つかったという。もしこの情報が確かであれば、これらの銅器は、あるいは仏教儀式の場面で用いられたと考えることもできる。<sup>(139)</sup>しかし宋代において大型な銅器が、すでに流行から外れていた背景を視野に

挿図41—b 『事林広記』にあらわれた鼎図（右上）

挿図41—a 『事林広記』にあらわれた爵図（左上）

入れると、なぜ四川省の彭州において、三代の銅器を丁寧に写した作品が何故これほど数多く窖蔵に残されていたのかという解明すべき多くの課題をこの発見は提起している。

#### 4 地方士紳の珍藏

注目すべきことに、先に述べた四川省の窖蔵からの銅器が三代の要素をふんだんに含んでいたのに対し、ともに発見された瓷器は宋代当時の通常の器形を示している。この点に関して言えば、同じく四川省の遂寧金魚村

Jinyuanで発見された窖蔵はやや特殊である。そこからは、三代の銅器に係のある多種多様な器形が龍泉窯の青瓷に再現されている。例えば双耳獸首簋、鬲、双耳獸首鼎、貫耳壺などがそれに当たる<sup>(140)</sup>。このような質の高い青瓷の数々は南宋の宮廷専用ではなく、むしろ地方の士紳たちにまで愛蔵されるものとなった。この窖蔵からは九八五の瓷器が発見され、とくに鼎の器形に豊富なものが見られ、三代の銅器の意象が瓷器に甚大な影響を与えたことを伝えている。

技法面で注目すべき点は、三代の銅器を写した器には手の込んだ仕上がり<sup>(141)</sup>が認められる。例えば高さがわずかに七・一センチの香炉にも彫花の技法で獸足をかたどっており<sup>(142)</sup>、あるいは、蓮花文を刻花の技法で表現するなどのバラエティに富んでいる<sup>(143)</sup>。

また、特筆に値するものとして、瓷器における「八卦文」の登場を挙げることができる<sup>(144)</sup>（挿図47）。重慶の榮昌窖蔵から出土した鼎に印花の技法をもって八卦文が表されるが（挿図48）、これは三代にあまり見ることのできない

挿図43 三足壺 中国四川省 彭州窖蔵

挿図42 甗 中国四川省 彭州窖蔵

挿図44 銅器上の夔龍文 中国四川省 彭州窖蔵

挿図45 銅器上の芭蕉葉文 中国四川省 彭州窖蔵

挿図46 青磁鼎 中国四川省遂寧 金魚村  
窖藏

文様である。ただし『宣和博古図』では、鼎を周易六四卦と関連付け、以下のように記している。「周易六十四卦、莫不有象、而独於鼎言象者、聖人蓋有以見天下之跡、而擬諸形容、象其物宜、故謂之象（中略）以適神明之徳、以類万物之情」<sup>(145)</sup>。六四卦の図像は、四川省の窖藏から発見された銅鏡にもしばしば認められ、銘文を伴うものもある。例えば「水銀集陰精、白煉后得鏡、八卦開象備、衛神成永命」<sup>(146)</sup>という銘文は、宋人の易学重視を物語っている<sup>(147)</sup>。このような思想を背景に、宋代の人は鼎に八卦文をかたどり、神への祈りを表したのであろう。

さらに龍泉窯で三代の鬲が写された例もあり<sup>(148)</sup>、韓国・新安の海底からも同じような作品が引き揚げられている<sup>(149)</sup>。八卦文は人々の移動とともに台湾にまで伝わり、道光年間の造営である淡水廟に奉納された香炉（挿図50）にも図様は取り入れられ、民間信仰の脈絡のなかで延々と受け継がれている<sup>(150)</sup>。なお、朝鮮半島や日本における受容も興味深い問題であり、さらに検討する必要がある<sup>(151)</sup>。

挿図47 八卦紋鼎 中国四川省遂寧 金魚村窖藏

ここで付け加えておきたいのは、四川省の遂寧金魚村の窖藏では、九八五点を数える瓷器は全体の九八%を占め、龍泉窯の青瓷が三四二点含まれるほか、少量の広元窯の作品も含まれていることである。そのなかで三代の意象を有する瓷器はもっぱら景德鎮窯と龍泉窯の作品であり、いずれも現地の窯における製品ではなく、外部からの輸人品となる。当時の状況下、これだけ大量にのぼる陶磁器の運搬には相当な費用がかかったことが推測され、仏像など寺院に関わるものが含まれないことを考えれば、この窖藏の性格は地方士紳の珍藏であった可能性が大きいと言える。

このように、三代の銅器の意象は地方士紳に迎えられ、それが当時の銀器の分野にも影響を与えることとなった<sup>(152)</sup>。宋代の金銀器は唐代と異なり、外からの影響は薄れるが、その分、三代の意象が顕著になってゆくことが見て取れる。

器形から言えば、宋代の金銀器に鼎、簋などの三代の意象を持つかたちが取り入れられており、いずれも唐代に見ない器種となる<sup>(153)</sup>。既に述べたとおり、

挿図48 八卦紋鼎 中国四川省重慶 榮昌窖藏

宋人は鼎を易学と結びついて考えており、そのため、三代の意象として広く用い、銅器、瓷器、銀器のいずれの材質にも作例が残されている。金銀器に関して言えば小型のものが多く、泰寧鼎<sup>(154)</sup>（挿図51）のように、高さがわずか九・三センチしかないものや、一三・八センチに達する綿陽鼎もある。前者

挿図49 八卦紋鼎（新安海底遺物） 元時代

挿図50 八卦紋鼎 台湾 淡水廟

の場合、「夾層合成法」<sup>(155)</sup>という技法で厚く二層に作られ、三代の銅器が持つ「渾厚凝重」の外観を狙ったものと思われる。このような小型の銀鼎に関しては、瓷器のように実際に香炉として香を焚いて使われたかどうかは、なお研究の余地がある。

彭州の窖藏からは、九点を数える銀製の水注と温碗も発見され、銀器の世界に見る三代の意象を示す好例となった。水注は発見当時、温碗のなかに置かれていたと報告がなされており（挿図52）、その「温碗」には双耳があり、出土時に耳が破損されたものもある。<sup>(157)</sup>

これらの九点の温碗も、二つのグループに分けることができる。五点は口縁が花卉形をなし、四点は三代の「彝」に近い器形をしている。このような形の器類は宋墓の壁画にも見ることができ、白沙二号宋墓の墓室西南の壁画にあらわれている<sup>(158)</sup>（挿図53）。さらにこの四点のうち三点に、三代の意象の文様を見つけることができる<sup>(160)</sup>（挿図54・55）。「雲雷紋」なども執壺や彝の口縁部や圈足に見いだすことができ、考古報告では「蕉葉蟬文」、<sup>(61)</sup>「三角形紋」

挿図51 泰寧鼎 南宋末元初 中国福建省 泰寧窖藏

挿図52 銀製水注および温椀  
南宋 中国四川省彭州

挿図54 銀製水注および温椀  
南宋 中国四川省彭州

挿図55 銀製水注および温椀  
南宋 中国四川省彭州

挿図53 白沙宋墓壁画 中国河南省禹県白沙

と称している。ただし宋人の習慣を引用すれば、『重修宣和博古図』では前者を「山紋」「蟬紋」<sup>162</sup>、後者を「垂花紋中著以蟬紋」<sup>163</sup>と称している。

『重修宣和博古図』によれば、文様には各種の寓意が込められており、かい摘んで紹介すると「雷取其奮豫、雲取其須澤」<sup>164</sup>、「山紋以取其仁之静」<sup>165</sup>、

「蟬以取其趨高潔而不沉於卑穢、清高而不貪」<sup>166</sup>などを挙げる事ができる。文様の取捨においての基準が定まり、「取清高而不貪、則著之以蟬文、欲時動而澤物、則文之以雲雷」<sup>167</sup>としている。注意しなければならないのは、このような理解は本来宋代の宮廷や官府側のものであったが、民間の地方士紳の注文した器にまで影響を与えたことである。また銀器の銘文を見れば、「羅祖一郎」、「王家十分」などとあるように、しばしばその工房や作者名が記されていた。

また、「□司官□□」、「歴回官」はそれぞれ彭州窖蔵から発見された

CPJ226の水注<sup>167</sup> CPJ175の温碗(挿図54)に認められ、あるいは官に関わった工房による製作なのかもしれない。<sup>168</sup>『武林旧事』<sup>140</sup>に中央と各地方に官の工房が設置され、制作された銀器はよく臣下への贈り物として使われたとの記載があるが、窖蔵から発見されたこれらの三代の意象を持つ器は、官と関わったものであったのだろうか。この問題についてさらに検討の余地がある。

いずれにしろ三代の銅器の意象は、宋代においてこれまでの外部からの影響が色濃く反映された銀器の世界にも浸透したことは注目に値する。その文様には、仏教的な蓮花紋、忍冬紋、そして世俗的な人物紋なども共存している。地方の裕福階層の人々はこれらの器をことのほか珍重し、ついに窖蔵の宝物として保存されることになった。

### (三) 三代の銅器の意象を「殉埋」する

司馬温公の『書儀』や朱熹の『家礼』に一般庶民の祖先祭祀の儀式作法が示されているが、三代の意象をもつて祭るべきとは書いていない。しかし宋代においては、江南一带の裕福な家には三代の銅器の意象を持つ器がよく使われ、埋納されている。さらにこれが祖先信仰に浸透し、元、明以降の五供祭器を墳墓に埋納する先駆となった。

江西省にある北宋の陳氏六娘 Chen Shituniangの墓(九〇八年)<sup>170</sup>や宋金公呉氏 Wushiの墓<sup>171</sup>からは、鉄の鼎が発見されている。南宋になっても淳熙五年(一一七八)の孫大郎の墓<sup>172</sup>に同様の習慣が認められ、また、嘉定元年(一一〇八)の夫人周氏の墓<sup>173</sup>からは錫の鼎が発見されており、注目に値する。さらに、湖南省の常清黄土山 Huangtushanにある建炎三年(一一二九)の邢少卿 Xing Shaogunの墓からは、被葬者夫婦と一緒に埋葬した墓室から、八卦文と火焰文をあらわした石製の鼎(挿図56)<sup>174</sup>が発見されている。<sup>175</sup>南京の龍潭か

らも、影青の浙江省の磐安M1宋墓より、小さな鼎が青磁の鼎が発見されており、嘉定癸未年(一一三三)前後のものと思なされている。<sup>176</sup>甬の形をなす香炉も江西臨江<sup>177</sup>や浙江德清<sup>178</sup>といった江南地方の墓からよく出土しており、

挿図56-a 石鼎 中国湖南省常清 黄土山

挿図56-b 墓室出土図

三代の銅器の意象の普及ぶりを示している。

#### 四、考古から玩古へ

##### (一) 古物市場の隆盛

北宋士大夫の「考古」、皇室の「倣古」の風潮に伴って、古物には新しい価値が吹き込まれ、それを識別し所有することは政治社会でのステータス・シンボルにまでなった。また、古物に関する書籍を印刷したり、古物を窖蔵におさめて珍藏するような事実は、ことごとくその価値を高め、本物を所有したいという人々の願望は非常に高かったと思われる。ただ三代の銅器は非常に古いものであったため、それを入手するには樵や牧童たちから「購入」する以外に方法はなかった。またこのような流行にあつては、その価格も決して安くはなかったと考えられる。歐陽修はこのような風潮をじかに見て、古物を収集するには「好」と「力」の二つの必須条件があると論じたことがある。また李公麟は、「千金不惜」という執念で古物のコレクターとなった。趙明誠 Zhao Mingchen の場合、彼が大学生の時に自分の服を質屋に出してまで相国寺で売っている古物の中から比較的低廉な碑文を購入したと伝えられているが、その後、官僚の一人が彼の家で黄金百両をもって古物を購入した事実もあったようである。宮廷にいたれば「一器値千金」という勢いで収集し、これによって皇室の所蔵品が豊富に蓄積された。<sup>(181)</sup>『東京夢華録』や『夢樸録』が北宋の繁栄ぶりを描くなか、いずれも当時の骨董屋の存在に触れており、古物の売買に携わった人々のことも文献に残されている。<sup>(182)</sup>時の市場の背景とあいまって、宋代においては古代墳墓の盗掘がはなはだしく行われ、<sup>(184)</sup>皇帝の墓でさえも被害にあったほどである。<sup>(185)</sup>今日、発掘調査が行われた皇帝や皇后の陵墓も、その多くはすでに古くに盗掘にあつていたことが判明

している。<sup>(186)</sup>南宋に至っては、江南地方の豊かな経済状況のもとで、古物に対する価値観にも新たな変化が生じるようになった。

##### (二) 廟堂から「明窓浄几」——「塵外之客」への新たな価値観

三代の銅器の意象は北宋から南宋にかけてかなり普遍的に認識され、それが儒、仏、道教の領域にまで浸透し、墳墓の闇から古物市場へと姿をあらわした。やがて文人の書齋、すなわち「明窓浄几」の世界で飾られるようになり、南宋の古物に対する新たな価値観が生まれた。北宋以来、文人士大夫は銅器を通じて三代を再現することを志し、「玩古」の態度を避けてきた。しかし南宋になるとこのような考えは希薄となり、三代の銅器の意象も人々の世俗生活の中に踏み込むことになる。その代表的な言説は、趙希鵠 Zhao Xigu の著した『洞天清録』と、張世南 Zhang Shinan の『遊宦紀聞』に見ることがができる。

宋の初め、呂大臨の集めた資料では三代銅器はおおむね士大夫の手にあつて、その中には官を歴任し『宋史』にも記録された人物が多い。これに対し張世南は、鄱陽 Poyang の出身であり、<sup>(187)</sup>自著の『遊宦紀聞』のなかにも「随侍宦遊、便登万里之蜀」とあり、壮年には「走江湖、無寧戚」、そのために書名を『遊宦紀聞』とした。三代の銅器に関する記録は逸聞、風習風物、医薬、園芸、曆法などの随所に見られ、<sup>(188)</sup>おおよそ寧宗から理宗（一一九五—一二六四）在位の頃のことと思われる。さらに、「仕閩中」<sup>(189)</sup>、「遊蜀道、徧歷四路、数十郡、周旋凡二十余年」と書いてあるが、経歴の詳細は不明である。『四庫全書総目提要』には「不知何官」<sup>(190)</sup>と述べた上で、「無一語及時政」とその本の性格を指摘している。彼のような経歴は北宋の楚々たる士大夫らとは異なり、本稿では「仕宦辺縁人」と呼びたい。一方、趙希鵠に関する資料は

さらに少なく、『四庫全書総目提要』<sup>(191)</sup>では彼を趙宋宗室子としているが、実際に調べたところ、「希鵠」の名字を見つけることができず、あるいは「皇室辺縁人」であったかも知れない。

『洞天清録』の作者もやはり「仕宦辺縁人」であった可能性が高く、自ら「清修好古塵外之客」と称している。そのため古銅器は明らかに生活を楽しむ文脈のなかで登場させられ、著者の態度をうかがうことができる。「人生一世、如白駒過隙、而風雨憂愁、輒居三分之一、其間得閑者、才三分之一耳」と人生の短さを指摘するとともに、生活を享受する行為として「摩娑鐘鼎、親見商周」と古物を机に並べ、それらを愛玩することで心の安逸を得、古代に思いを馳せる。このような文脈のなかにおいて、古物はしつかりと生活に溶け込み、そこには靈異な力が宿るとまで信じられるようになった。例えば、真なる古物に花を活かせば、その花の色が一段と鮮やかで萎れるのが遅いと「古銅器靈異」の条に記されている。<sup>(192)</sup>ここではじめて浮上したのが古物の真贋の問題である。宋初の士大夫にとって、青銅器の鑄造の問題にはほとんど関心が払われていなかった。これに対し、ここに至って真贋の識別が重要視されるようになった。<sup>(193)</sup>その徴しとして、「款識真偽」や「水土伝世三等古銅器」、「時光自然鏽色」などが関心の所在となり、その製作技術に關した「蠟模」の部分にも言及されるようになった。以上に述べたように、同じく三代の銅器の意象にあっても、人々の関心が時間の推移によって変化していたことが特筆される。

事実、『洞天清録』より若干早い『遊宦紀聞』においても、このような古物に対する認識の変化があらわれている。三代の銅器の意象は現世の中に再生され、人々により親しまれ、広く受けいれられるようになっていた。その象徴的なものとして『梅花喜神譜』を挙げることができ、梅の形態を銅器の

「占」、「簋」、「爵」、「鼎」の形に見立て、それぞれを圖像化している(挿図56)。なお、この頃から鼎の形をした印文も多く登場する。士大夫は鼎を生活のなかの香炉<sup>(195)</sup>として認識するようになり、三代の銅器の意象はより通俗的になった。このような流れが、やがて元明へと受け継がれてゆくのである。<sup>(196)</sup>

#### 余論

市場の需要、新価値観と表裏をなすのは、士大夫に由来する『三礼図』や『考古図』、それに皇室に由来する『重修宣和博古図』ばかりでなく、三代の銅器の意象はさらに宋末元初の百科全集にも収録された。代表的なものが、陳元靚 Chen Yuanlingの著した『事林広記』である。陳氏は福建省寧安 Ning'anの出身で、「無功名仕歴、惟隱居而已」として知られ、著作も平明で分かりやすい。<sup>(197)</sup>

挿図57—a 占図  
〔『梅花喜神譜』より〕

挿図57—c 爵図  
〔『梅花喜神譜』より〕

挿図57—b 簋図  
〔『梅花喜神譜』より〕

挿図57—d 鼎図  
〔『梅花喜神譜』より〕

注目すべきことは、この本の最古の版本は元の至順（一二三〇～一二三三）のものであるが、遅いものは明の嘉靖二〇年（一五四一）のものが知られており、二百年以上の幅がある。<sup>(198)</sup>元の『新編纂図増類群書類要事林広記』の「器用類」の図は非常に詳細で、『宣和博古図』と『三礼図』系統のものを兼ね備えている。それに対して鄭氏積誠堂のそれは『三礼図』系統のものが中心で、<sup>(200)</sup>「祭器儀式門」に編入されている。椿荘書院本のあとがきによれば、「是編増新補旧、視他本特加詳焉」<sup>(201)</sup>とあるので、あるいは、『宣和博古図』の部分を集者が新たに加えたのかもしれない。いずれにしろ宋版の原本は確かめられないが、二百年間に各種の版本の内容は百科全集の図絵の形で広く民間に流布した。さらに、『朝鮮王朝実録』にもあらわされ、その礼儀図絵（挿図8）は朱熹の『紹熙州県秩奠儀図』の孔子廟の祭典系統と、『事林広記』の民間百科全書の系統を兼ね備え、朝鮮陶磁器の祭器の器形の手本として参照された。

事実、唐宋時代の印刷の発達、仏教、道教の隆盛、科挙制度の確立、とくに南宋時代の仏教と儒教の經典の印刷がピークに達したことによって、戦乱によって失われた三代の銅器は図絵として今日まで書物のなかに残された。<sup>(202)</sup>『三礼図』が国子監で図絵され、その系統には『新定三礼図』、<sup>(203)</sup>陳祥道 Chen Xiangdao の『礼書』、<sup>(204)</sup>林希逸 Lin Xiyi の『廣齋考工記解』（挿図56）などが含まれる。また、漢の鄭玄 Zheng Xuan による注、唐の陸徳明 Lu Deming による釈文の『纂図互注周礼』（挿図57）は『三礼図』と徽宗皇帝の収蔵図絵の礼局様を兼ねた形式となっていた。確かに言えることは、三代の銅器の意象は宋代における『三礼図』と『宣和博古図』の二大系統を通じて、図絵の形で後世まで広く流布したことである。

宮廷のコレクションを収録した『重修宣和博古図』、それに士大夫のコレ

クションを集めた『考古図』は、南宋から元明のあいだに幾度も翻刻され、その都度、図絵を新たにする必要があった。そのため三代の銅器の意象は元来の姿とは少しずつ離れてゆき、後には最も基本的な特徴しか留めることができなかつた。

挿図58—b 林希逸『廣齋考工記解』

挿図58—a 林希逸『廣齋考工記解』

宋人は仏教、道教が流行する中で儒教を改めて重んじ、それによって三代の銅器の意象が再び脚光を浴びることになった。さらに三代の銅器の意象は、当時の金銀器、瓷器の分野などにも影響を与え、西方の要素が強かった金銀器に三代の意象を吹き込み、宋瓷の器形にも三代を再生させたのである。こ

挿図59—a 鼎図（『纂図互注周礼』より）

挿図59—b 爵図

の頃、三代の銅器は国家を鎮護する器や祖先を祭祀する器から、儒教、仏教、道教および民間信仰の中へと再生され、さらに寺院仏閣から文人書齋へと飾られるようになったのである。三代が意味するものは時間の流れとともに変化を遂げ、その本来の姿から一步一步と離れ、「考古」から「玩古」への過程を経て、民衆にも親しみをもって迎えられた。儒教、仏教、道教と民間信仰の隆盛は三代の意象の普及と拡大の大きな力となり、それが隣国の朝鮮にまで影響を与えた。宋代に始まったこの「考古」から「玩古」への流れは、これ以降の元、明を経て清代までの千年の間、脈々と受け継がれ、今日の世界各国の博物館に所蔵される宋代以降の銅器やその三代の意象を備えた金銀器、陶瓷器などが、それをよく物語っているのである。

註

- (1) 清末から民国のこの分野についての研究は、目録的なものや簡略的なものに留まった。
  - (2) 王国維「宋代金文著録表」『觀堂集林』上、二九五～二九八頁。
  - (3) 容庚『商周彝器通考』燕京學報專號、第二一・二二・一四・一五章（哈佛・燕京社、一九四四年）。
  - (4) 葉國良『宋代金石學研究』（台北・国立台湾大学国文学研究所、一九八二年）四頁。
  - (5) Robert Poor, 'Notes on the Sung Dynasty Archaeological Catalogues,' *Archives of the Chinese Art Society of America* 19, 1965, pp. 33-44; Peter Hardie, 'Six Later Chinese Bronze at Bristol,' *Appollo* vol. XCII, 1971, pp. 58-59.
  - (6) William Watson, 'On Some Categories of Archaism in Chinese Bronze,' *Arts Orientalis*, 1973, pp. 1-13.
  - (7) 張臨生氏も故宮にある宋代以後の「文王方鼎」と「仲駒方簋」を、このような文脈の中で理解している（張臨生「文王方鼎」與「仲駒方簋」『故宮學術季刊』一五卷一期、一九九七年秋季、一～四四頁）。
  - (8) Ulrich Hausmann, 'In Search of Later Bronzes,' *In Scholars Taste*, Sydney L. Moss, Ltd. 1983.
- 宋代以後の銅器は古美術品業界の関心をも喚起し、以下などのカタログが作られた。

(Michael Evelygh, 'Later Chinese Bronzes,' in Catalogue of an exhibition at the International Asian Antiques Fair, Hong Kong, 1984)。

- (7) Ross Keer, 'A Preliminary note on some Qing bronze types,' *Oriental Art*, vol. XXXI (4), 1980/81, pp. 447-456; 'The Evolution of bronze style in the Jin, Yuan and Early Ming Dynasties,' *Oriental Art*, vol. XXVI I (2), 1982, pp. 146-158; 'Metalwork and song Design: a bronze vase inscribed in 1173,' *Oriental Art*, vol. XXVI (2), 1986, pp. 161-176, Ross Keer, *Later Chinese bronze*, London: Victoria & Albert Museum, 1990.

(8) Robert D. Mowry, 'Chinese's Renaissance in Bronze,' *the Robert H. Clague Collection of Later Chinese Bronze 1100-1900*, Phoenix Art Museum, 1993. (著書の中で著者は宋代の青銅器に「文芸復興」という言葉を使い、非常に賞賛しているが、論の展開にやや不十分なところがあり、踏み込んだ議論にはならなかった。

(9) 陳夢家「宋大晟編鐘考述」『文物』一九六四年第二期、五二一―五三三頁。

(10) 張臨生「李公麟與北宋器物學」『千禧年宋代文物大展』(台灣國立故宮博物院、二〇〇一年)一九―四六頁。その前に、Robert Harris 氏も李公麟の古董鑑賞家および芸術家としての側面を論じたことがある。Robert Harris Jr., 'The artist as Antiquarian: Li Conglin's study of Early Chinese Art,' *Arribus Asiae*, vol. 55, No. 3-4 (1995), pp. 237-280.

(11) 陳芳妹「再現三代」『千禧年宋代文物大展』一九三―三三〇頁。

陳芳妹「宋古器物學的興起與宋做古銅器」『台灣大學美術史研究集刊』一〇期、二〇〇一年三月、三七―一六〇頁。

(12) 蔡汝芬「官府與官樣 淺論影響宋代瓷器發展的官方因素」『千禧年宋代文物大展』三二一―三二七頁。

(13) 謝明良「探索四川宋元器物窖藏」『區域與網絡 近千年來中國美術史研究國際學術討論會文集』二〇〇一年、一四一―一六九頁。

(14) Jessica Rawson, 'Novelties in Antiquarian revivals: the case of the Chinese bronze,' 『故宮學術季刊』二〇〇四年二卷一期、一―三四頁。

(15) 「元鼎六年、得鼎汾水上、應邵曰、得寶鼎故因改元」『漢書』卷六・武帝紀(景印文淵閣四庫全書二四九冊、二〇〇頁)。

「其夏六月中、汾陰巫錦為鳥氏祠魏厓后土宮旁、見地如鉤、掇視得鼎、鼎大異於衆鼎」『史記』卷一一・孝武帝本紀(景印文淵閣四庫全書二四三冊、一三三頁)。

「是時、美陽得鼎、獻之、下有司議、多以為宜薦見宗廟」『漢書』卷二五下・郊祀志(景印文淵閣四庫全書二四六冊、九頁)。

「(永平) 六年在王雒山出寶鼎、廬江太守獻之」『後漢書』卷二・明帝紀(景印文淵閣四庫全書二四九冊、一三頁)。

「初、孝王有雷鼎、直千金、戒後世善寶之、母得以與人。任后聞而欲得之、李太后曰、先王有命、母得以尊與人、他物雖百拒萬、猶自恣、任后絕欲得之、王襄直使人開府取尊賜任后」『漢書』卷四七・文王三傳(景印文淵閣四庫全書二四七冊、七頁)。

「(劉) 杳少好學、博綜群書、沈約・任昉以下、每有遺忘、皆訪問焉。嘗於約坐、語及宗廟犧樽、約云、鄭玄答張逸、謂為鳳凰尾姿婆然。今無復此器、則不依古、杳曰、此言未必可據、古者樽彝、皆刻木鳥鸞獸、馨頂及背、以出內酒。頃魏世魯郡地中得齊大夫子尾送女器、有犧樽作犧牛形、晉永嘉賊曹疑於青州發冢景公冢、又得此二樽、形亦為牛象。二器皆古之遺器、知非虛也、約大以為然」『梁書』卷五〇・劉杳列傳(景印文淵閣四庫全書二六〇冊、一八頁)。

以上の引用は容庚の「宋代古金書籍述評」『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』(南京、國立中央研究院歷史語言研究所、一九三三―一九三四年)一頁(後に加筆し、同『頌齋述林 宋人著錄金文叢刊』(香港・翰墨軒、一九九四年)に収録)。

(16) 歐陽修『集古錄』序(景印文淵閣四庫全書六八二冊)。

(17) 宋人が自稱するところの「考古」、「博古」、「金石学」が Rawson 氏の言う Antiquarian に該当する。

(18) 徽宗は「做」と称し(例えば、政和盥の銘文に「皇帝肇做礼器作」とある。容庚『商周彝器通考』一八七頁)、民間は「偽古銅器」と称した(趙希鵠『訪古銅器』、「銅腥」『洞天清錄』) 景印文淵閣四庫全書八七一冊)ものが Rawson 氏の言う Recreation に該当する。

(19) 劉敞「先秦古器記」『公是集』卷三六(景印文淵閣四庫全書一〇九五冊、一五頁)。

(20) 呂大臨『考古圖』の序を参照。今日伝わる『考古圖』の版本は、元の大徳三年(二二九九)の陳翼子の刊行によるものや明の黄徳時、黄徳懋の刊行、丁雲鵬の図絵による泊如齋版(台湾・故宮博物院北平図書館善本、北京図書館善本)などが知られている。本稿では泊如齋版を使用した、その理由はそれが陳翼子の刊行によるもの由来し、図絵が綺麗のためである。

(21) 元の泊如齋版『考古圖』に収録。なお、以後の唯清亦政堂版、四庫版にはない。

(22) 金中樞「北宋科挙制度研究」『新華学報』六卷一期、一九六四年、二〇五―二八頁。

「北宋科挙制度研究続」『國立成功大學歷史学報』一期、一九七八年、一三四―二四三頁。

(23) 李弘祺「宋代官学教育與科挙」台北・聯経、一九九四年、一六一頁。  
歐陽修の『帰田録』に徐鉉という人が科挙に参加した際、「鑄鼎象物」の題で一

位を取ったことが記されている。彼は君臣の関係を鼎の形に喩え、「足惟下正、詎聞公鍊之欽傾、鉉仍上居、実取王臣之威重」としている。

(24) 『宋史』卷四三二・列伝第一九〇・儒林一、一二七九五頁。

(25) 註23の歐陽修前掲書卷一、一〇頁。

(26) 王應麟『玉海』(景印文淵閣四庫全書九四四冊、九九六～一〇九二頁)。

(27) 熙寧五年十一月、陝西路が永興軍と秦鳳の両路に分かれる。

楊仲良『資治通鑑長編記事本末』卷二四〇(永和・文海出版社、一九六七年)。

(28) 註23の歐陽修前掲書卷一、一三頁。なお、歐陽修が劉原父に与えた五つの書簡によれば、嘉祐二年から四年の間、劉原父はすでに長安におり、嘉祐四年に歐陽修から「韓城鼎銘」と「博山鑿記」を受け取っている。

(29) 劉敞の著作『劉氏春秋伝』、『劉氏春秋意林』、『公是弟子記』、『公是集』などでは「三代」という言葉が三四カ所に登場している。

(30) 劉敞『公是集』卷一、一頁。『同』卷三六、一五頁。

(31) 註30の劉敞前掲書卷三六、一五頁。

(32) 例えば「叔高父旅簋」(註20の呂大臨前掲書卷三、三五頁)の場合、それが聶崇義『三礼図』(景印文淵閣四庫全書一二九冊)に載っている筈とは器形が異なっている。すなわち、「容四升、其形外方内円而小之似龜、有首有尾有甲有腹。」とあるのに対し、『三礼図』では「制如桶、龜形蓋」と記されている。

(33) 歐陽修『文忠集』、『集古録』などの文献には、宋代の士大夫たちの三代銅器をめぐる交流の様子が記されている。

(34) 『考古図』では「臨江劉氏」と称している。

(35) 『宋史』卷三一九・列伝七八。

(36) 次頁別掲表参照。

(37) 註30の劉敞前掲書卷三六、一五頁。

(38) 『宋史』列伝・卷四四四・列伝第二〇三・文苑六、『考古図』では「廬江李氏」と称している。

(39) 『宋史』地理志によれば、いずれも江南地方にある。

(40) 呂大臨『考古図』卷五、四頁。『同』卷四、三三～三四頁。『同』卷四、六四頁。『同』卷六、一六頁。

(41) 「清塞周立、指揮二、其一北蕃婦附之、營壽州、其一破淮南紫金山岩所得騎軍、營延州。」

『宋史』「志」・卷一八七、『同』「志」第一四〇「兵禁軍上建隆以来之制」。

(42) 次頁別掲表参照。

(43) 註41の前掲文。

(44) 翟耆年「李伯時考古図五卷」『籀史』卷一(景印文淵閣四庫全書六八一冊)。

(45) 『宋史』卷三三八・列伝七九。

(46) 註23の歐陽修前掲書卷一、一〇頁。

(47) 『考古図』卷七、一一頁。

(48) 哲宗が即位した元祐四年(一〇八九)、蘇軾は王安石の変法を反対したため、杭州に左遷された(『宋史』卷三三八、列伝九七)。

(49) 次頁別掲表参照。

(50) 注意すべきは、五点のうちで少なくとも四点は今日の考古発掘資料のなかに認めることができるものである。

(51) 郭黎安『宋史地理志匯釋』合肥・安徽教育、二〇〇三年、八〇頁。『元豊九域志』卷三、『輿地廣記』卷一三、および『宋志』による。

(52) 『宋史』表卷二二一、『同』卷第二・宰輔二。

(53) 『宋史』列伝卷三三三・列伝七二。

(54) 註51の郭黎安前掲書、四二頁。

(55) 蔡襄「陳殿丞送行詩序」『端明集』卷二九(景印文淵閣四庫全書一〇九〇冊)。

(56) 余英時「宋代「士」的政治地位」『朱熹的歴史世界』上篇(台北・允晨、二〇〇三年)、二七一～三二二頁。

(57) 黄惠賢・陳鋒編『中國俸禄制度史』(武漢・武漢大学、一九九六年)二九七～二九九頁、及び二五〇～二五二頁。

王曾瑜『宋朝階層結構』(石家莊・河北教育出版社、一九九六年)二六一～二六二頁。

間接引用として、陶晉生『北宋士族 家族・婚姻・生活』中央研究院歷史語言所專刊一〇二、(台北・中研院史語所、二〇〇一年)五二頁。

(58) 蘇軾『東坡集』卷六(北京・線裝書局、二〇〇二年)二頁。

(59) 「胡穆秀才遺古銅器似鼎而小、上有兩柱、可以覆而不蹶、以為鼎、則不足、疑其飲器也、胡有詩答之。隻耳獸鬣環、長臂鵝喙、三趾下銳春蒲短、兩柱高張秋菌細、君看翻覆俯仰間、覆成三角翻兩髻。古書雖滿腹、苟有用我亦隨世、嗟君一見呼作鼎、注升合已漂逝。不如學鴟夷、尽日盛酒真良計。」蘇東坡『東坡集』卷五(胡昭儀・劉復生・粟品孝『宋代蜀學研究』(成都・巴蜀書社、一九九七)一五頁)

(60) 文彦博『潞公文集』卷一、八、九、一一、二〇(景印文淵閣四庫全書一一〇〇冊)。

寇準『忠愍集』(景印文淵閣四庫全書一一二四冊)。

(61) 二書はいずれも現存しないが、逸文が劉敞の『公是集』と歐陽修の『集古録』に

器名	出土地	出典
弁敦及蓋	扶風	『考古図』 卷3、頁7
伯庶父敦	扶風	『考古図』 卷3、頁12
伯百父敦	原驪山白鹿	『考古図』 卷3、頁19
中言父旅敦		『考古図』 卷3、頁21-2
□敦	塾屋	『考古図』 卷3、頁
晉姜鼎	韓城	『考古図』 卷1、頁6
公誠鼎	上雒	『考古図』 卷1、頁9-10
叔高久旅簋	扶風	『考古図』 卷3、頁34
彊中匪		『考古図』 卷3、頁43
彊伯旅匜	藍田	『考古図』 卷6、頁4-5

註36 表

器名	出土地	出典
庚・辛・癸鼎	京師	『考古図』 卷1、頁1-3
挈壺	河澶	『考古図』 卷4、頁49
召中考父壺	京師	『考古図』 卷4、頁51
父丁爵	新鄭	『考古図』 卷5、頁1
己舉爵	壽陽紫金山	『考古図』 卷5、頁4
觚	京師	『考古図』 卷5、頁16
鄭方鼎	新鄭	
丁父鬲		『考古図』 卷2、頁1
四足疏蓋小敦	京師	『考古図』 卷3、頁29
三牛敦	京師	『考古図』 卷3、頁30
簋蓋	京師	『考古図』 卷3、頁50
軍從彝		『考古図』 卷4、頁10
虎彝	新鄭	『考古図』 卷4、頁18
父己人形彝	壽陽紫金山	『考古図』 卷4、頁22
主父己足迹彝	京兆	『考古図』 卷4、頁23
持戈父癸卣	京師	『考古図』 卷4、頁32
父己足迹卣		『考古図』 卷4、頁35
象尊		『考古図』 卷4、頁40
足跡鬯	鄭	『考古図』 卷4、頁42
獸環細文壺	壽陽紫金山	『考古図』 卷4、頁45
龍文甌	京師	『考古図』 卷5、頁21
仲姑旅匜	京兆	『考古図』 卷6、頁6
弩機	嬖之蘭溪	『考古図』 卷6、頁11
戈	壽楊紫金山	『考古図』 卷6、頁12
削	京師	『考古図』 卷6、頁14

註42 表

器名	出土地	出典
王子吳鼎	京兆	『考古図』 卷1、頁24
乙鼎	鄭郡覃甲城	『考古図』 卷1、頁28
斝口鬲		『考古図』 卷2、頁3
仁旅鬲	京兆	『考古図』 卷2、頁10
垂環鬲		『考古図』 卷2、頁14
文足甌		『考古図』 卷2、頁24
圓甌		『考古図』 卷2、頁25-6
細文鬲	滎陽	『考古図』 卷2、頁29
口耳足敦		『考古図』 卷3、頁28
軍伯彝	京兆	『考古図』 卷4、頁19
伯玉敦彝	京兆	『考古図』 卷5、頁25
季姬匜	京兆	『考古図』 卷6、頁7

註49 表

認められ、図絵の部分が呂大臨『考古図』にみえる。

- (62) 鄭樵『通志』(景印文淵閣四庫全書三七二冊) 卷七三。
- (63) 『宋史』卷三四〇、九頁下。  
『宋元学案』卷三一、七頁。
- (64) 註11の陳芳妹「宋古器物學的興起與宋做古銅器」『國立台灣大學美術史研究集刊』一〇(二〇〇一年三月) 四八〜五五頁。
- (65) 呂大臨『考古図記』『考古図』一二二頁。「莊周氏謂、儒者逐跡喪真、……不知聖人之可尊、先王之可法、……非取以器爲玩也、觀其器誦其言、形容髣髴、以追三代遺風」
- (66) 『集古錄』の跋に「豈徒於嗜好之僻而以爲耳目之玩哉」とあり、趙明誠(一〇〇八〜一一二九)も『金石錄』の序で「非特区區爲玩好之具而已」と強調した(景印文淵閣四庫全書二五二冊、六八一頁)。
- (67) 李清照は紹興二年(一一三二)に夫である趙明誠の著『金石錄』の跋文を書く際、コレクターとしての経済的窮屈さや、作品を入手した際の喜び、書物として編纂することの必要性などを詳細に述べている(趙明誠『金石錄』の後序へ一〜六頁)参照。
- (68) 余英時「回向三代 宋大夫政治文化的開端」『朱熹的歷史世界』二五五〜二八五頁。
- (69) 沈括『夢溪筆談』卷一九(景印文淵閣四庫全書八六二冊、一〜三頁)。
- (70) 宋應星『天工開物』序(台北・台灣商務印書館、一九八七年)。
- (71) 蕭嵩等『大唐開元禮』卷六九。
- (72) 黃進興「道統與治統之間—從明嘉靖九年(一五三〇)孔廟改制談起」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第六一本第四分(台北・中央研究院史語所、一九九〇年) 九二〇〜九二二頁参照。
- (73) 宋の大中祥符元年(一〇〇八)、真宗は詔を下し、孔子を「玄聖文宣王」に追諡し、五年(一一〇二)「至聖文宣王」に改めた。『宋史』卷一〇五、二五四八頁、『同』卷八、一五二頁。また徽宗は崇寧三年(一一〇三)、宣王殿を「大成殿」に改めた(『宋史』卷一〇五、二五四九〜二五五〇頁)。南宋の紹興十年(一一四〇)、高宗は文宣王の「大祀」を復積し、州県の「中祀」を行うように定めた。(孔繼汾『闕里文獻考』卷一四へ上海古籍出版社、一九九五年)一五頁)。
- (74) 鄭居中等『政和五札新儀』卷二二六。
- (75) 朱熹「伏見政和年中儀礼局鑄造祭器皆考三代器物遺法」『紹興州県釈奠儀図』
- (76) 容庚『商周彝器通考』四八一〜四八二頁。
- (77) 石守謙・葛婉章編『大汗の世紀』台北・国立故宮博物院、二〇〇一年、一二〇頁、図IV.3。
- (78) 国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』卷五(京城・朝鮮国史編纂委員会、一九五五〜一九六三年) 一八〇〜一八七頁。
- (79) 朱熹の『紹興州県釈奠儀図』の版本は三種あり、四庫底本、四庫全書本、指海本であるが、いずれも清版である。王光熙・王燕均校点『紹興州県釈奠儀図』「校点説明」三

頁。朱傑人・嚴佐之・劉永翔『朱子全書』(上海古籍出版社、二〇〇二年)。ただし、朱熹がはたして本当に『紹熙州縣儀圖』の作者なのかどうかについては、校点説明と学界の議論を参照されたい。

(78) 大阪市立東洋陶磁美術館『心のやきもの李朝—朝鮮時代の陶磁—』(読売新聞社、二〇〇二年)二六頁・図7「粉青家嵌雷文祭器」、および、四二頁・図22「粉青線刻花文祭器」。

片山まび「再生産される威信財」『国立歴史民俗博物館研究報告』九四(国立歴史民俗博物館、二〇〇二年)三〇—三四頁。謝明良教授の資料提供に感謝する。

(79) 文化公報部・文化管理局編『新安海底遺物』(京城・同和書店、一九八一年)。

(80) 余和年・鄧章泉「大竹出土明代銅器」『四川文物』一九九四年一期、七二—七三頁。

(81) 宋初の梅堯臣(一〇〇二—一〇六〇)は慶曆六年(一〇四七)の地方官張君仲が孔子祠及びその祭器類を整えた行為を賞賛している。梅堯臣「新息重修孔子廟記」『宛陵集』卷三二(景印文淵閣四庫全書二二八冊)一—二頁。

(82) 宋の士大夫らは三代の銅器を「收藏」、「研究」するほか、南宋の江南地方の士大夫はさらに「三代の銅器の倣品」を墓の中に納め、死者の再生に備えた。朱熹の時代に近い南宋の浙江省平陽に生きた黄石(一一一〇—一一七五)は「仿三代銅器意象」の銅器、銅鐘一点、小銅方壺二点(高九・四センチ)(図4)、小銅鼎一点(高一三・五センチ)、銅鏡一と黒褐色釉の壺五点をもって妻の墓に納めた。墓誌銘によれば、黄石は紹興八年(一一三八)の進士、福州州学の教授、皇族関係者を教える「宗學」の教授を歴任した人物であったことが知られる(葉紅「浙江平陽県宋墓」『考古』一九八三年一期、八〇—八一頁)。

(83) Francis Haskell & Nicholas Penny, *Taste and the Antique*, New Heaven and London: Yale University press, 1994, p. 7.

(84) 註15を参照。

(85) 葛兆光『中国思想史』卷二(上海・復旦大学、二〇〇一年)一七二—一八四頁。余英時『朱熹の歴史世界』二五五—二八五頁。

(86) 『宋史』卷九八、二四二—二四三頁。

(87) 「太祖初即位、朝太廟、見其所陳籩豆、則曰、此何等物也、侍臣以礼器為對、帝曰、我之祖宗寧曾識此、命撤去、亟令進常膳、親享必、顧近臣曰、令設向來礼器、俾儒士輩行事」邵伯温『邵氏聞見錄』卷一(北京・中華書局、一九八三)五頁。

(88) その多くは「郡国所献」、例えば「邢州献瑞鼎」などに由来する。註44の前掲書、巻上。

(89) 翟蒼年「皇祐三館古器図」(註44の前掲書卷一四、一五—一六頁)。  
註20の呂大臨前掲書註。  
葉国良『宋代金石学研究』一九八二年。

(90) 鄭居中等『政和五礼新儀』卷首、一四頁。

(91) 吾妻重二氏は宋代の家廟および祭祖制度を研究しており、その成果を参照された。「宋代の家廟と祖先祭祀」(小南一郎編『中国の礼制と礼学』(京都大学人文科学研究所研究報告、二〇〇一年)五〇五—五七五頁)。

(92) 註11の陳芳妹「宋古器物学的興起與宋做古銅器」『国立台湾大學美術史集刊』一〇期、七五—七六頁及び八六—八七頁。

(93) 羅家祥「崇寧党禁」興北宋晚期政局』『北宋党争研究』(台北・天津書局、一九九三年)二七六—三〇七頁。

(94) 『宋史』『徽宗本紀』卷一九、三六八頁、および、『同』『志』卷一四〇、二五四四—二五四六頁。

(95) 蔡條「鐵園山叢談」卷一、一〇頁。「冶鑄地見在南郊、中夜冶鑄至四鼓時、忽有神光達禁中、政燭福寧殿、紅赤異常、宮殿於是盡明如晝、殆曉始熄……在旋命其父蔡京鳥為安礼儀使、方其講事之際、有幾千萬隻鶴飛來、蔽空不散。翌日、上(徽宗)幸之、千餘鶴飛來、雲為之变色、五彩光艷、往後、用王仔昔之議從九鼎時、亦有飛鶴之祥、雲氣如書卦之象。」

(96) 『重修宣和博古図』卷一、三—五頁。

(97) 『中興礼書』には南宋宮廷の陶磁器の復古について触れている。蔡致芬「官府與官様」『千禧年宋代文物大展』三三—三三七頁。

(98) 中国社会科学院考古所等『南宋官窯』(北京・中国大百科出版社、一九九六年)。

(99) 杜正賢「杭州老虎洞窯址瓷器精選」(北京・文物出版社、二〇〇二年)。なお、汝窯に関しては、河南省文物研究所等『汝窯的新發現』(北京・紫禁城出版社、一九九一年)図39、40、119など。河南省文物考古研究所「宝豊清凉寺汝窯址二〇〇〇年発掘簡報」『文物』二〇〇一年一期(一六—一七頁)を参照されたい。越窯に関しては、浙江省文物考古研究所等「浙江越窯寺龍口窯址発掘簡報」『文物』二〇〇一年一期(三四—三九頁)を参照されたい。

(100) 註92の陳芳妹前掲論文参照。

(101) 北宋の杭州・靈隱寺の僧契嵩は、仏教と儒教の関連性を強調し、「儒仏者、聖人之教也、其所出雖不同、而不同歸於治」と説いた(契嵩「寂子解」『鐔津文集』巻八へ景印文淵閣四庫全書一〇九一冊、二四頁)。また、契嵩は儒教の經典である『周易』、『中庸』、『老子』、『莊子』などをもって、仏教からの解釈をも試みた。「今

儒之仁義礼智者、壹非吾仏所施之万行乎」(「中庸解」『鍊津文集』卷四へ景印文淵閣四庫全書一〇九一冊)。

朱漢民等『中国學術史』宋元卷上、江西教育出版社、二七―二八頁。

- (102) 「龍文三耳卣」は彭澤馬山洞穴から出土したもので、呂大臨によれば法相院の僧侶は「伝其器以示人」とそれを陶淵明の酒壺と誤って見なした(註20の『考古図』巻四、三九頁)。このことから、宋初の寺院では三代の銅器を多く所有したことが了解されよう。

- (103) 定県博物館「河北定縣發現兩座宋代塔基」『文物』一九七二年八期、三九―五一頁。

- (104) 樊瑞午、郭玲娣「河北正定舍利塔基地宮清理簡報」『文物』一九九九年四期、三八―四三頁。

- (105) 石櫃と共に出土しており、そこにある銘文から造塔発願者は扈彦珂であることが判明した。その年代はおおよそ九四〇―九四七年の間である(註104の前掲簡報、四三頁)。

- (106) 中央研究院の報告によれば、隋代墓からも白瓷の香炉が出土し、隋代の河南一帯に鼎式の香炉はよく流通していたようである。「小屯」丙編付録一、隋唐墓葬下、中央研究院歴史言語研究所、二〇〇五年、三九七頁、図123。

- (107) 齊東方「唐代金銀器研究」三〇五―三九四頁(北京・中国社会科学出版社、一九九九年)参照。

- (108) 出光美術館編『地下宮殿の遺宝 中国河北省定州北宋塔基出土文物展』(出光美術館、一九九七年、図8)。

- 定県博物館「河北定縣發現兩座宋代塔基」『文物』一九七二年八期、三九―五一頁。

- (109) 陝西法門寺考古隊「扶風法門寺唐代地宮發掘簡報」『文物』一九八一年一〇期、一―二六頁。唐代の香炉に関する研究は冉萬里「唐代金屬香炉研究」『文物』二〇〇〇年二期、一三―三〇頁。亀井明德「隋唐・奈良期における香炉の研究」『亞洲古陶瓷研究』I(専修大学亞洲古陶瓷学会、二〇〇四年)を参照されたい。

- (110) 陝西省考古研究所、耀州窯博物館『宋代耀州窯址』(北京・文物出版社、一九九八年)六〇三―六〇五頁。

- (111) 註110の前掲図録、カラー図版9―4と85―5。

- (112) 註110の前掲図録、六五五―六六〇頁。

- (113) 「鑑山主以天聖宣賜行道者五百盒裝羅漢青瓷香炉為示復用韻、高林杲景日欲出、卻視諸山雲自入、道人導我敵円龕、五百金仙爭突兀、耀州燒瓷撲不朽、獅子座中蓮

葉繞、乱余得比鎮山靈、莫恨當時賜田少、世人變滅隨空雲、至人來往懸念眼、長眉下生会有辰、摩杪笑視默与論、趙蕃(一一四三―一二二九)『惇熙稿』(影印文淵閣四庫全書一一五五冊)。

蔡汝芬「論『定州百瓷器、有芒不堪用』句的真確性及十二世紀官方瓷器之諸問題」『故宮學術季刊』卷一五、二期、六七頁。

- (114) 四川省博物館・廣元県文管所「四川廣元石刻宋墓清理簡報」『文物』一九八二年六期、五三―六一頁。

- (115) 「天竺靈籤」の年代に関して、羅振玉によれば、宋代の嘉定年間のものという。ただし、これは作風からの推論で確証はない。羅振玉「天竺靈籤跋」『中国古代版畫叢刊』冊一(上海古籍出版社、一九八八年)三〇一―三〇六頁。なお、周心慧もこの説に従っている。「新編中国版畫史図録一 唐宋元版畫」(学苑出版社、二〇〇〇年)三四頁。本文においては、その作風が広元地域の石刻の文様と似ていることから、宋代の民間の作風と見ている。

- (116) 『寧波文物集粹』(北京・華夏出版社、一九九六年) 図103。

- (117) 林士民「浙江寧波天封塔地宮發掘報告」『文物』一九九一年六月、一―三七頁。

- (118) 鄒造「道郷集」卷三七(四庫全書珍本十二集一六二―一六三冊) 一六頁上。

- 王安石の妹である張奎妻も「晩好佛書」であったことが知られる(王安石『臨川先生文集』卷九九、六二〇頁)。

- (119) 陸佃『呂陶集』卷一六一五、四九六頁。

- 陶晋生「士族婦女教育」『北宋士族 家族・婚姻・生活』一六一頁。

- (120) 「金剛般若波羅蜜經」、「佛説觀世音經」、「般若波羅蜜多心經」、「太上老君説常清靜經」、「佛説北斗七星延命經」など、蘇州博物館・江陰縣文化館「江陰北宋『瑞昌県君』孫子娘子墓」『文物』一九八二年二期、二八―三六頁。

- (121) 韓森(Valerie Hansen)、「包委民訳『変遷之神』(Changing gods in Medieval China) (杭州・浙江人民出版社、一九九九年) 一〇―一一頁。

- (122) 「枯木聲靈滄海東、參差宮殿翠晴空、平生不厭混巫媪、已死猶能効国功、万戸牲醪無水旱、四時歌舞走兒童、伝聞利沢至今在、千里桅樞一信風」黄公度「題順濟廟」

- 『知稼翁集』卷上(景印文淵閣四庫全書一一三九冊)。

- (123) 「元祐丙寅歲、墩上常有光氣夜現、郷人莫知為何様、有漁者就視、乃枯槎……當夕遍墩旁之民曰、我湄洲神女、其枯槎実所憑、宜館我於墩上」『白塘李氏族譜』蔣維鏞編校『媽祖文獻資料』(福州・福建人民出版社、一九九〇年) 一―三頁。

- (124) 劉克莊「後村先生大全集」(景印文淵閣四庫全書一一八〇冊) 卷九一、一七頁。
- (125) 母學勇と謝明良両氏の研究を参考されたい。母學勇「劍閣宋代窖藏總述」『四川

- 文物』一九九二年三期、一五〇―一九頁。謝明良「探索四川宋元器物窖藏」『區域與網路』國立台灣大學美術史研究所、二〇〇一年、一四一―一六三頁。
- (126) 『廣弘明集』第二十五・司戎議一首(『大正新修大藏經』五二卷、二八七頁)。
- (127) 劍閣からの出土品は『四川文物』に簡略に紹介されている。国科会の支援を受け、筆者は実際に当地で調査することができた。また、成都考古研究所の王毅所長や張維珊氏の協力を得たことに対し、謝意を表す。
- (128) 張啓明「四川閬中県出土宋代窖藏」『文物』一九八四年七期、八五―九〇頁。
- (129) 江油縣文物保護管理所(黃石林)「四川江油県發現宋代窖藏」『考古與文物』一九八四年、六期、五二―五五頁。
- (130) 蕭高洪「試論隋唐宋(遼夏金)時期印章藝術風格的形成與發展」『隋唐宋印風(付遼夏金)』重慶出版社、一九九九年、一五―一六頁。南宋の劉叔剛は十三経疏の『礼記注疏』を刊行し、出版関係に携わった人と思われる。
- (131) 註130の蕭高洪前掲書、一三頁。
- (132) 『宋史』地理志卷八八・志第四一、二二七五頁。
- (133) 陳元靚「事林廣記」(至元六年、鄭氏積誠堂刻本、北京・中華書局、一九九八年)、庚集卷上、一七五頁、戊集卷一〇、七二頁。
- (134) 司馬光「書儀」卷三、六―八頁。『同』卷一〇、四頁。
- (135) 朱熹「家禮」卷四、一六頁、『同』卷一、四―五頁。
- (136) 常清市博物館「常清黄土山宋墓」『湖南考古』下(二〇〇二年)四四―四九頁。
- (137) 元至順(一二三三〇―一二三三三)年間の建安椿莊書院本に収録された『後集』一一、一―五頁。『同』卷一〇、一〇頁。
- (138) 未発表資料。国科会の支援、成都考古研究所の王毅所長と彭州博物館館長の協力に感謝する。
- (139) 註11の陳芳妹「宋古器物學的興起與宋做古銅器」の註104(『國立台灣大學美術史研究集刊』一〇期、五九頁)。
- (140) 遂寧市博物館(莊文彬)「四川遂寧金魚村南宋窖藏」『文物』一九九四年四期、四二―四八頁。
- (141) 李偉綱・何瀛中『宋瓷精華—金魚村窖藏』(四川・美術出版社、二〇〇一年)。
- (142) 註140の前掲書四〇頁、図7・二一―八九。
- (143) 註140の前掲書四〇頁、図8・二二―四六。
- (144) 李偉綱・趙川等「金魚村宋瓷窖藏的價值」(註140の前掲書一一頁)。
- 重慶市博物館「重慶市榮昌原宋代窖藏瓷器」、四川省文物考古研究所「四川考古報告集」(北京・文物出版社、一九九八年)四〇七―四一四頁。

- (145) 『重修宣和博古圖』卷一、三頁。
- (146) 黃石林「江西發現宋代窖藏」『四川文物』一九八七年二月、六三―六五頁。四川省文物管理委員會等(茫桂杰・胡昌鈺)「四川德陽県發現宋代窖藏」『文物』一九八四年七月、八三―八九頁。大邑新文化館「四川大邑新安仁鎮出土宋代窖藏」『文物』一九八四年七月、九一―九四頁。
- (147) 胡昭儀・劉復生・粟品孝「宋代蜀學研究」(成都・巴蜀書社、一九九七年)二二―二四六頁。
- (148) 五点の鬲式香炉のうち、大小の異なる三種類に分けることができ、いずれも西周の中晩期の鬲をよく写している。西周のこのような大小異なる鬲がセットになって発見される例については、河南省陝県上村嶺などに見ることができる。(河南省文物考古研究所・三門峽市文物工作隊「上村嶺號國墓地」下冊へ文物出版社、一九九九年へカラー図版4、1、M2001)。
- (149) 文化公報部文化財管理局「新南海底遺物」資料編1(同和出版社、一九八二年)一八頁、図6、7。宋代の龍泉窯が元の時代になって、朝鮮半島や日本に運ばれたという説もあるが、詳しくは出川哲朗・穆向前訳「遂寧窖藏出土龍泉窯青瓷與新安沈船及日本伝世品之比較」『宋瓷精華』二四―二五頁を参照されたい。
- (150) 李乾朗「鄞山寺調查研究」台北・台北省政府、行政院文建會、一九八八年。
- (151) 謝明良「十五至十六世紀日本の中国陶器鑑賞與収蔵」『國立台灣大學美術史研究集刊』一七期、二〇〇四年九月、一六一―一九〇頁。
- (152) 北宋において、銀器はいろいろな用途をもって広く使われた。皇帝が臣下に与えるものから庶民間の贈り物まで幅が広い。
- 孟元老『東京夢華録』卷二「宣德樓前省府官宇」。「在汴京景靈東官南門大街以東南、有唐家金銀舖：酒店上戸銀罐酒七十二文一罇……」。《東南樓街巷》「有金銀絲帛交易之所屬」、『同』卷四「大内西右掖門外街巷」。「亦有金銀舖、《會仙酒樓》「兩人対坐、飲酒亦須用注碗一副、盤盞兩副、果菜碟各五斤、水菜碗三五隻、及銀近百兩点。雖一人独飲、盤盞亦用銀盃之類……」。『同』卷五「民俗」：「其正酒店戸見脚店三兩次、打酒便敢借與三五兩銀器、以至貧下人家就店呼酒、亦用銀器供送」。《育子》「父母家以銀盃……」。『同』卷六「元旦朝會」：「賜鬪裝銀鞍馬衣著金銀器物……」。《立春》「宰執親王百官皆賜金銀……」。『同』卷七「駕幸臨水殿勸爭標錫宴」：「執一竿上掛以錦絲銀盃之類、《駕幸射殿射弓》「一人口銜一銀盃、」。『同』卷八「是月卷陌雜賣」：「悉用銀器、」。『同』卷九「宰執親王宗室百官入内上寿」：「勝者、則以銀盃、御席酒盞……」。《廊下純銀食器》、。『同』卷一〇「十二月」：「僧尼三五人作隊念佛、以銀銅沙羅……」。周密「武林舊事」によると、南宋になっても、臨安において金銀器の

使用はなお盛んで、皇帝が大臣に下賜したり、皇室の娘が嫁入りするなどの場面に使われた。同書の卷二（燕射）「賜宰臣以下十兩銀碗各一隻」、（公主下降）「銀器百兩、：聘財銀一万兩、對御賜筵五盞：謁見舅姑：銀器三百兩」、（同）卷三（歲除）「：金銀器皿」、（同）卷六（歌館）「凡酒器、沙罐、冰盆：悉以金銀為之」、（游手）「：以偽易真、至以紙為衣、銅鉛為金銀」。『同』卷七（德壽宮起居注）淳熙三年（一一七六）の条「皇上進香：金銀器皿」、『同』卷八（宮中誕育儀禮略）条「大銀盆」、（皇后散付本府親屬宅眷幹辦使臣以下）「銀盤盞共二千兩」、『同』卷六（酒樓）「官妓數十人、各有金銀酒器千兩、以供飲客之用」。

- (153) 陝西歷史博物館・北京大学考古文博學院・北京大学震旦古文明研究中心編著『花舞大唐春—何家村遺寶精粹』（『文物』二〇〇三年）、齊東方氏の唐代の金銀器に関する研究を参照されたい。齊東方『唐代金銀器研究』（北京・中国社会科学出版社、一九九九年）。

韓偉『磨硯書稿 韓偉考古集』（北京・科学出版社、二〇〇一年）。

綿陽市博物館（胥澤蓉）『綿陽市出土宋代窖藏銀器、錢幣』（『四川考古報告集』三〇八—四〇五頁）。

- (154) 李建軍『福建泰寧窖藏銀器』（『文物』二〇〇〇年七期、六五—七〇頁）。
- (155) 肖夢龍「試談宋代金銀器的造型和裝飾藝術」『文物』一九八六年五期、八一—八五頁。成都市文物考古研究所・彭州市博物館編著、謝濤『四川彭州宋代金銀器窖藏』（北京・科学出版社、二〇〇三年）一四七頁。

- (156) 註155の謝濤前掲書九四頁。
- (157) 註155の謝濤前掲書一一六頁。『重修宣和博古図』は以下のように三代の銅器を分類している。すなわち「瓶与壺」、「尊与壺」、「彝与舟」、「其類相須之器」としている（『重修宣和博古図』卷八、四頁）。出土したこの九セットの銀器は上記の「其類相須之器」の部類に属し、「彝」、「執壺」と共に使用している場面は三代の銅器の意象が生きていたことと見えよう。

- (158) 宿白『白沙宋墓』（『文物』北京・一九五一年、図9、一〇一頁、墓の推定年代は徽宗時代である）。
- (159) 註155の謝濤前掲書カラー図版35、37、39。
- (160) 註155の謝濤前掲書カラー図版37、33。
- (161) 註155の謝濤前掲書一一一—一一九頁。

- (162) 『重修宣和博古図』卷二五、一二、四八頁、卷一六、一〇頁、卷五、一二頁。
- (163) 『重修宣和博古図』卷三、一五—一六頁。

- (164) 『重修宣和博古図』卷六、三二頁。
- (165) 『重修宣和博古図』卷五、一〇頁。
- (166) 『重修宣和博古図』卷五、一二頁、卷一六—一〇頁。
- (167) 『重修宣和博古図』卷一六、一〇頁。
- (168) 謝濤「宋代金銀器概況」（註155の謝濤前掲書所収）。
- (169) 註145を参照。
- (170) 薛堯「江西南城、青江和永修的宋墓」『考古』一九六五年一一期、五七一—五七二頁。

- (171) 江西省文物工作隊等「江西鉛山鯨蓮花山宋墓」『文物』一九八四年一二期、九八六—九九九頁。
- (172) 孫定榮「江西金溪宋孫大郎墓」『文物』一九九〇年九期、一四—一八頁。
- (173) 方志良「浙江諸盟南宋董康嗣夫婦墓」『文物』一九八八年一二期、四八—五四頁。
- (174) 常清市博物館（徐小林）「常清黄土山宋墓」湖南省文物考古研究所、湖南省考古学会編『湖南考古』下（岳麓書社、二〇〇二年）四三四—四四六頁。
- (175) 金琦「南京市郊征龍潭宋墓」『考古』一九六三年七期、三四四頁。
- (176) 趙一新「浙江磐安蘇安文宋墓」『文物』一九八七年七期、七二—七三頁。
- (177) 黃願壽「江西清江出土的南宋青白豆器」『考古』一九八九年七期、六七—二頁。
- (178) 袁華「浙江德清出土南宋紀年墓文物」『南方文物』一九九二年二期、二五—二六頁。

- (179) 註66の趙明誠前掲書、後序。
- (180) 李心傳「建炎以來繫年要録」卷二七（景印文淵閣四庫全書三二五冊）。
- (181) 葉夢德「避暑録話」卷下。
- (182) 「相国寺万姓交易」二「相国寺每月五次開放万姓交易：殿後資聖門前皆書籍玩好願書」『東京夢華録』卷三。

- (183) 「又嘗見緞紳之士、競欲取媚于權門之子、悉与市纏易古器、鬻画図、得一珍宝古玩、即盛飾而求售、争妍而乞憐、儻合其意、美官要職、指日可得、儒衣儒冠而為侯門之僮僕、恬不以為恥」『三朝北盟會編』卷一五九（景印文淵閣四庫全書・史部記事本末類、一一五四—一頁）。葉國良「附帶常壳賣考」『宋代金石学研究』一九八二年、三一—三五頁。
- (184) 「宣和間、内府尚古器、士大夫家所藏三代秦漢遺物、無敢隱者、悉獻於上。而好事者須爭尋求、不較重價、一器有直竿縉者、利之所趨、人競搜剔山沢、發掘塚墓、無所不至、往往數千載藏、一但皆見、不可勝數矣」葉夢德「避暑録話」卷下。
- (185) 周密「楊髡發陵」『癸辛雜識』續集卷上（景印文淵閣四庫全書一〇四〇冊）。

(186) 河南省文物考古研究所編『北宋皇陵』（鄭州・中洲古籍出版社、一九九九年）。河南文物研究所・鞏臬文物保管所「宋太宗元德李后陵發掘報告」『華夏考古』一九八八年三月、一九～四六頁。宋代に行われた盜掘の状況に関しては、王子今『中国盜墓史 一種社会現象的文化考察』（北京・中国廣播電視出版社、二〇〇〇年）一五七～一七一頁を参照されたい。

(187) 陳振孫『直齋書錄解題』（景印文淵閣四庫全書、六七四冊）卷一一、五二五頁。

(188) 『四庫全書總目提要』は遊宦紀聞に「嘉定甲戌」（一一二四）、「紹定癸巳」（一一二二）と記される部分から推測した。

(189) 『遊宦紀聞』卷一〇。

(190) 『四庫全書總目提要』遊宦紀聞。

(191) 『宋史』卷一一五。

(192) 「古銅瓶鉢養花果」、「古銅器入土、年久受土器深以之養花、花色鮮明如枝頭、開速而謝遲。或謝則就瓶、結実、若水誘、伝世古則髑、陶器入土千年亦然」趙希鵠『洞天清録』一三五頁。

(193) 南宋の頃、三代の銅器の贗物はすでに多く出まわっていたと思われる。『洞天清録』が述べる真贋識別は贗物を見てからの議論にはかならない。

(194) 宋伯仁『梅花喜神譜』卷上「大葉八枝」、「欲開八枝」、「大開一十四枝」。『中国古代版書叢刊二編』第一輯（上海古籍出版社、一九九四年）五九、七一、五四、五一頁。

(195) 「梅学士詢性喜焚香、其在官所、每晨起、將視事、必焚香兩爐、以公服罩之、撮其袖以出、坐定、撒開兩袖、郁然滿室焚香、時人謂之梅香」陳敬、「喜香」陳氏香譜』卷四（景印文淵閣四庫全書八四四冊）。また、同書には「焚香辟瘟」、「燒香引鼠」などの内容がある。

(196) 『洞天清録』は明の嘉靖年間に『悉囊廣要』という簡便な本のセットにも収録されて大いに流布した。その発行者は以下のように述べている。「大不盈掌、於遠遊行行李甚便」、「以之而居家、則家可理。以之而遊芸、則芸可精。以之而衛生、則養老安幼」（北京図書館古籍珍本叢刊）八二冊、書目文獻出版社、一九八八年）なお、このような生活の芸術化を追求する書物は明代に多くあらわれており、曹昭の『格古要論』、高濂の『遵生八牋』、陳繼儒の『妮古録』、文震亨の『長物志』などがこの類にあつた。Craig Clunas, *Superfluous Things* (Cambridge: Polity Press, 1991, p. 10-11) 参照。

(197) 胡道静「一九六三年中華書局影印本前言」〔陳元靚『事林廣記』（影印元後至元六年鄭氏積誠堂刻本、北京、中華書局、一九九九年）附録、五五九頁〕。

(198) 森田憲司「關於在日本的『事林廣記』諸本」〔事林廣記』附録、五六六頁〕。

(199) 『新編纂図譜類群書類要事林廣記』卷一一（椿莊書院刊本、一～五頁）、『同』卷一〇（一〇頁）。

(200) 『新編群書類要事林廣記』戊集卷一「事林廣記」（鄭氏積誠堂刻本）三六五頁。

(201) 『新編纂図譜類群書類要事林廣記』前集・目錄、七六頁。

(203) 宿白「唐宋時期的彫版印刷」（北京・文物出版社、一九九八年）一～一〇頁。

周心慧「新編中国版書史図録』第一冊（北京・学苑出版社、二〇〇〇年）二八～四四頁。

(203) 鄭振鐸『中国古代版書叢刊』（一）（上海・古籍出版社、一九八八年）。

(204) 『北京図書館古籍珍本叢刊』経部三（北京・書目文獻出版社、一九八八年）。

(205) 国家図書館善本書庫南宋後期刊、元延祐四年（一一二七）修補本。

（国立台湾大学藝術学研究所）

（訳者 慶應義塾大学院後期博士課程）

\*原著 陳芳妹「追三代於鼎彝之間——宋代從「考古」到「玩古」的轉變」『故宮學術季刊』第二十三卷第一期、二〇〇五年、二六七頁～三三二頁。

（本翻訳論文は海外編集委員による平成十八年度の推薦論文である）